

子を入にも御讀みきかせあるべし。

の如く教訓勸説の意を添へたり。然れども話説の材料多くは荒唐無稽の事件にして寓意と見る外は大抵信ずること能はざるものなり。是等の草子にして今日に傳はる重なるものは前に掲げたる外尙ほ『小町草子』『御曹子鳥わたり』『唐糸草子』『木幡ぎつね』『七草草子』『猿源氏草子』『物卿太郎』『さいれいし』『蛤の卿子』『子教盛』『二十四孝』『梵天國』のせざる草子、『猫の草子』『波出草子』『和泉式部』『一寸法師』『さかき』『福富草子』『音なし草子』『化物草子』等あり。御伽草子の外また此の時代に古物語の體に倣へる物語ありき。一條禪岡兼良の『鴉鷲合戦物語』及び『魚類合戦物語』『魚鳥平家』ともいひて平家物語に倣ひたるもの(作者未詳)『常磐姫物語』(作者未詳)など呼べる滑稽小説は時世を諷刺せん意にて世に出でしものならんといふ。尙ほ『鳥部山物語』『松帆浦物語』(作者共に未詳)等は『群書類聚』の中にも掲載せられて人の知るところなり。是等何れも文章も趣向も探り出でし評すべき程のものならねば云はず。

## 第六期 江戸時代の文學

### 第一章 總論

年代の範圍 江戸時代に於ける文學の概況 言語文章

江戸時代の文學とは慶長八年(二二六三)徳川將軍家康幕府を江戸に創設せしより以來慶應三年(二五二七)前將軍徳川慶喜公其の職を辭して王政復古の時に至る二百六十餘年間の文學をいふ。

江戸時代に於ける文學の發達は空前の偉觀を呈し中古奈良朝は云ふまでもなく平安時代の盛時といへども決して其の比にあらざりき。從來多くは貴族の掌中にのみ限られし文學今や平民の手にも移りて各種の社會悉く之れを有し且又從來多くは平安若しくは其の附近の地に限られしもの今や京大坂及び江戸の三府は論なく僻遠なる九州の果て廣漠なる奥羽の隅までも普及して皆それの文學を有せざるはなきに至りぬ。漢學は將軍家康其の世道に益あるを知りて之れが講習の端緒を開きしより爾來歷世其の方針を變ぜざりしかば支那的思想まづ士人の間に榮え經世治民の術を講ずるもの修史の業に従ふもの相つぎて出でた

り。國學はた草莽の間より起りて大いなる發達を爲し積年亂離の間に紛糾せる語格など漸く明らかになりぬ。俳諧の如き卅双子の如き又は淨瑠璃の如き前期の末葉に於いて只、わづかに其の萌芽の見るべかりしもの及び見るべからざりしものも大方此時代に入りて大成せり。特に貞享元祿の前後は文豪の輩出まきりにして各種の文學其の榮を競へり。林鶯峰、西山宗因、山崎闇齋、山鹿素行、下河邊長流、熊澤蕃山、井原西鶴、松尾桃青、木下順庵、徳川光國、僧契沖、伊藤仁齋、北村季吟、榎本其角、服部嵐雪、貝原益軒、近松門左衛門之れより稍下りては新井白石、荻生徂徠、室鳩巢、荷田春滿、有賀長伯、竹田出雲、八文字舍自笑、太宰春臺、紀海音等は就中其の名聲最も高く世に喧傳またり。是より先にも有名なるものに細川幽齋、松永貞徳、藤原惺窩、林道春等數人ありき。著書は其の名高きもののみを掲げんとするも猶ほ枚舉に遑あらず。

江戸の文學は最初京都よりも起りたるものありといへども大抵大坂の地を中心として發生し而して後江戸に移り又各地に傳布するに至れり。蓋し應仁の戰亂以降京都の地は往々修羅の街となりしかば從來専ら文學の維持者たりし公卿

縉紳も一は兵亂を避けんがために一は糊口の道を得んがために諸國に下りしが大坂は別けて當時の要津たりしより此處に來住して文筆を效ふるものも多かりき。かゝれば大坂の地が江戸初世に於ける文學の中心となりしは全國兵革に忙はしき程に此處には絶えず僅少なながらも養成せられたる文學思想の一時に發生して此の美果を結べるなり。京都が尙ほ多少文學の産出地たりしは同地が曾て文學唯一の場所たりしところとて幾多の劇變を蒙りつゝもなほ縉紳の手に遺留せりしもありて之れが發生の運に會せりと見ゆ。江戸の地は文學を獎勵せし歴代の將軍の住居せるところ社會上及び政事上樞要の地なりし故に自然文學者の此の地に來るも拙からず後つひに其の中心となりけるなり。元祿以後漢學と國學とはなほ大家碩學相繼ぎたりしが小説戯曲に關せるものは又昔日の如くならざりき。漢學はた訓詁の學を離れて眼を經世治民の點に注ぐもあり或は卑近なる俗文をものして勸戒の意を述ぶるもありきと雖も元祿頃に比ぶれば寧ろ其の名高きもの少かりき。獨り國學の進歩は殊に著るくして歌文の註解を爲すもの古實律令を主とするもの神道國史を研究するもの考證を專一

とするもの雜多の方面に向ひて其の進路を開きぬ。加藤真淵、伊藤長衡、建部綾足、富士谷成章、湯淺常山、井上金峨、伊勢貞丈、本居宣長、中井竹山等其の名高かり。かくて寛政享和より文政文化及び天保の頃にかけては元祿以後に於ける文學の盛時とすべし。漢學には世に寛政の三學士と稱せられたる柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲を初め山本北山、中井履軒、菅茶山、頼山陽、大鹽後素等あり國學に加藤千蔭、村田春海、瑞保己一、清水濱臣、本居春庭、松平樂翁、石川雅望、屋代弘賢、香川景樹、平田篤胤等あり小説には山東京傳、瀧澤馬琴の讀本に名ある、式亭三馬、十返舎一九の滑稽諧謔を主とせる、柳亭種彦の草双紙に名ある爲永春水の人情本を旨とせる其の他太田蜀山の狂歌狂文に名ある俳諧、戯曲一として多少の名家あらざるはなかりき。さばれ之れを元祿頃の最盛時に比較すれば或は及ばざるものなきにあらざり俳諧戯曲の如き蓋し是れなり。明和安永の頃より和蘭學の研究其の緒を開きて今や歐米の文物も次第に其の化を我が文學に及ぼすものあらんとするに至りぬ。此の時代の文學を貫通せる大體の思想は儒教的なりしこと言ふを要せず國學の勃興と共に惟神的なりし點も亦聊か見えたるが如し。學の治國年天下若しくは

齊家修身の道に關するは勿論小説戯曲といへども大方勸善懲惡を主とする傾向のほの見えざるもの少かりき。其の他佛説によれるものあれど鎌倉及び室町等の時代に見えたるとは異にして是れはた因果應報を説いて勸善懲惡の意を表するに外ならざりしなり。其の他なほ此の時代の文學が一般に泰平の氣を帯びたるは時勢の然らしめたるものといはんのみ。

言語は室町時代亂離の後を承けたれば國學の研究に従事せる輩つとめて之れが矯正を企圖せりといへども其は多く文章上の語法にして談話に用ひられたるは依然彼の時代の紛亂せるまゝを踏襲せり。故に言語と文章とは只だ稀に世に出でたる言語一致の文牒若しくは俗語の文牒ならざる外は悉く著るしき懸隔を見るに至りぬ。就中國學者の作れる文は何となく擬古の癖あり漢學者の述べたるは何處となく漢文直譯めきて時流の言語を距ると遠かりき。また當時の文章を見れば漢學者の漢文直譯めきたる國學者の全く擬古的なる又は擬古癖ある、小説家又は戯曲などの雅なるもの俗なるもの雅俗を折衷せるもの其他俳文狂文等殆どすべての文牒を羅致せり。此の中最も能く和漢の言語さては梵語を調和して

自在に活用し、更に前期以前に優れしを小説戯曲等の文なりとす。實に小説戯曲の中には詞想共に江戸時代文學の精髓ともいふべきものあるを見る。

さて當時代の文學を講ずるに當りては例の如く章を追ひ節を分かつべき筈なりしかども終りに云ふ如くさはるふしありて其の意を果すを得されは只其の大體のみを講じて筆を止めんとす。其の體裁の從來のと稍異なりて有名なる作者と其の重要な著書とを記したるは更にみづから進みて研究せんとするもの、乘にもとてなり。讀者能く之れを諒せよ。

## 第一章 世界の狀態

政治上の異動 武士道 倭客 元祿の奢侈 元祿以降の困弊

佛教耶蘇教及び神道 漢學國學並び洋學の振興

慶長八年徳川家康征夷大將軍に任ぜられ江戸に居りて關東を領し威望漸く盛なりしが關ヶ原の一戦にゆくりなくも豊臣氏の股肱を奪ひ奪いで慶長元和の兩役に大坂城を陥れしかば天下の大權全く其の手に遷れり。家康將軍此に於いて幕府を江戸に創立し子孫其の職を世襲するとなりぬ。二代秀忠將軍篤厚にして

守成の量あり三代家光將軍殊に英邁にして勵精其の治を謀りしかば幕府の紀綱大いに張り江戸幕府十餘世に於ける政權の基礎こゝになりき。そも徳川氏が政治の方針たるや上皇室に對しては充分尊奉の意を効せども京都に所司代の役を置きて常に朝廷の動靜を察せしめつゝ暗黙の間に其の實權を殺ぎて時に干渉を逞うし下諸侯を封ずるには能く地勢を考へて之れを配置し要處には親藩譜第を置き外様の諸侯をば僻遠の地に移し且つ是等相互の交通を離隔せんがために親藩譜第を其の間に居らしめて常に監察の任に當らしめ又妻子を江戸の地にあらしめ參勤交替の法を設けて悖反の虞に備ふるなど頗る周密なりき。然れども家光將軍宏量大度にして金銀を惜まらず四代家綱將軍の時は土木繁く加ふるに饑饉さへ之れにつぎしかば財政幾何か紊亂の傾向を生じたり。五代綱吉將軍の時には奢侈の風漸く起こり剩へ酒井忠清の如き賄賂を貪りて華美を競ひ將軍亦常に遊樂を歡びしが嚴正なる堀田正俊刺殺せられ姦佞邪智なる柳澤吉保寵用せらるゝに及びて上下の風俗ますます奢靡淫逸に流れて幕府の財政困難を告ぐるに至れり。是に於いてか貨幣改鑄の事あり金銀の價益下りて民次第に苦みぬ。

六代家宣將軍の治世に及びて、新井君美重用せられて政令の改革見るべきものありしが世の人は猶ほ遊興歡樂に耽りて勤儉の風日を追うて消磨し去りき。此の時に當りて英邁果斷を以て能く積年の弊風を矯正したるを八代吉宗將軍とす。奢靡を戒めて勤儉を奨め、武備刑令の弛めるを修め、又大いに殖産の業を奨励せり。洋書講究の禁を解きて歐西に於ける開化の輸入を勉めしむ此の時なりき。世に此の時代を徳川氏の中興とするも宜ならずや。まかれども九代家重將軍無能にして爲すなく十代家治將軍佞臣田沼意次のためにあやまられて幕政また紊れり。加ふるに連年天災地妖頻りにして上下困弊の極に達し怨嗟の聲四方に滿ちぬ。十一代家齊將軍の時執政に松平定信あり十二代家慶將軍の時には水野忠邦ありて銳意政弊を改革せしかば稍、其の功果の見るべきものありしに水野の改革のみは嚴に過ぎしがために失敗を以て終りぬ。此の頃より尊王の説天下を動かして世上何となく不穩の兆を現はせり。嘉永六年米糧浦賀に來り貿易を強請し其の他の諸國また次ぎて到りしより人心更に恟々たり。幕府外國の要求を拒む能はず十三代家定將軍の時安政五年終に米魯英佛蘭の五國と假條約を結び更に

又六國を併せて十一國と訂盟するに至りぬ。是れより四方尊王攘夷の論大いに起こりて幕府の非政を憤るものあり開港佐幕を主張するもの又少からず兩黨の争日に月に盛なりき。蓋し尊王論は國學の勃興と共に發はれたるもの、開港の説は洋學の研究につれて醸成せられたるものなれば兩黨の争は即ち内外思想の衝突とも見做すべし。さる程に兩黨の紛争は益々烈しくなりて中には殺伐横暴を逞しうするものある程なりしが幕府は毫も制する能はざるのみならず慶應三年長州藩を討ちて勝たざりしより其の威信全く地に墜ちぬ。かゝれば幕府も大勢の赴くところ如何ともすると能はず終に大政權を奉還し王政古に復りぬ。抑、此の間に於ける風俗習慣さては諸般藝術の状態等は如何なりしや。

應仁以降戰國の世を経て久しく養成せられたる殺伐尙武の氣象は此の時代の始めに於いて猶ほ見るを得たりき殊に江戸の地は古來慍悍を以て目せられたる關東の中心なるに剩へ永く干戈を弄して殺戮を事とせし諸國の武士の集合する府となりしかば一層剛壯なるを貫びたり。故に彼の鎌倉及び室町の時代に獎勵せられたる武士道の如きも愈々發揮せられて餘蘊なきに至りぬ。武士は孰れも忠勇

を専一として兵馬の術を鍛錬し義を千鈞の重にたぐへ命を鴻毛の輕に比するは常の事なり、二君に仕ふるは彼等の最も耻辱とするところ故に甚しきは君死して嗣君に仕ふるをさへ潔しとせずして殉死するも多かりけり。武士が其の身を奉ずるに清廉質素を旨とし利慾のために意志を枉ぐるを卑屈の極となし、は云はずもあれ復讐の如きはた江湖の美談として賞揚せられたり。而して諸藩の武士の黨を結びては、たし、あひを爲し新刀を購入せるもの、其の鋭鈍を試みんとして辻切、試切など行ふものありしは殺伐尙武の餘として往々目撃するところ其の弊とやいはまし。町人も亦長刀を帶して市中を横行するなどは珍しき事にもあらざりけり。幕府は是等の氣風を矯正して剛柔其の宜しきに適せんと計り粗暴の行爲は嚴かに制禁せしめ著るき効果も見えざりき。かくて此の殺伐武尙の氣風は遂に凝つて所謂俠客といふものを生ずるに至れり。俠客俗に男伊達といひ六方者または奴ともいふ。こは旗下の士常に己れらが天下の御直參なるを誇り江戸市中を横行して豪放寛濶私意を振ひたるより始まりしなり。町人のうちにも是等武士の専横を惡みて反抗せんとするより自然に武を磨き強を挫き弱を扶

けて傍ら豪放寛濶の行爲をなすものありき是れを町奴といひぬ。當時最も有名なりし者に大小神祇組、白欄組、鐵棒組、唐犬組、鶴鶴組、爪籠組等あり其の頭領には旗本に水野十郎左衛門を初めとして三浦小次郎、高木仁左衛門、近藤登、阿部四郎左衛門等、町奴に幡隨院長兵衛、唐犬權兵衛ありしは誰れも知るところ放れ駒四郎兵衛、夢の市郎兵衛、死人小左衛門、冥途小八、小佛小平等あり大坂にも亦これに類せるもの甚からざりき。俠客が然諾を重んじ死を見ることが歸するが如く秋毫の辱をも甘受することなく營利のために膝を屈せざりしは頗る武士道の要旨とするところに似たり。されども彼等は定まれる職業といふもの無く賭博を事とし又常に遊里に徘徊して其の日を送るも多かり好んで鬪錚をなし又調停を爲せり。さる程に俠客の弊多くして良民の憂ひとなること甚からざりしかば幕府又之れを嚴制せり。幕府の嚴制は多少其の風を改むるを得たりしが其の遺習永く後世にまで傳はりぬ。さはれ泰平日既に久しくして寶刀も鈍と等しき世となりては殺伐尙武を貴びし氣風も何時しか漸次に消亡し遂に所謂元祿風として有名なる奢靡淫逸なる俗を爲すに至れり。而して此の變化をしていよく助長せしめたるも

のを京大坂の風俗とす。抑、當時江戸は既に天下政權の中心たりきと雖ども猶ほ京都は千餘年來の帝都として學問に美術に工藝に其の他凡百の事物の進歩の盛なりし事到底江戸の企及するところにあらず大坂はた古來西國往來の要衝に當り船舶常に出入し殊に豊臣氏繁榮のみぎりには諸國の民輻湊の樞府たりしかば其の文明鋭に江戸に勝るものありき。然れども京都の俗は古より優柔にして奢靡を好み大坂の氣風また其の繁盛に伴ひて淫逸浮華なる所ありき。故に江戸が彼等の文物を輸入せんとせる希望は歲月の進むにつれて其の昔鎌倉武士が漸次上方風に感染して奢侈放蕩に流れしが如く不知不職の間に江戸人士の氣風の泰平の世に伴うて自然に驕奢に赴くを助け其の變化をして速かならしめたる也。かくして江戸の風俗は日を追ひて驕奢に化せしに元祿の頃となりては殊に貨幣の品質下りて米價大に騰貴し之れがために祿米を受くる旗下家人及び諸藩士等の家計俄に豊かとなりしかば到るところ更に其の風を増進せしめたり。就中町人のうちには富有なる者多く出來て江戸に紀伊國屋文左衛門、奈良屋茂右衛門の如き大坂に淀屋辰五郎、京師に中村内藏介の如き富王侯をも凌ぐほどなりしかば

随つて金銀を浪費すると夥く豪華のかぎりを競へり。此の時に至りては士農工商老若男女を問はず押しなべて奢侈放蕩柔弱優婉の態を喜び從來武功を談じ武器を弄びしものも碁將棋の類はまだしもなり歌舞宴樂に日月の短きを憂ひ武士にして手づから淨瑠璃を語り三味線を弄ぶものさへ數多かりき。服裝をはじめとして調度の末に至るまで世を擧げて驕奢なるを尙ひ極めて柔弱なる風にもせし事蓋し何人も想像の外なるべし。志かれども斯くの如き驕奢は如何でか永く續くべき。驕奢は幾程もなくして遂に困弊の種子となりけるに剩へ米價暴落に際會し士民悉く究乏の境に淪沈するの止むを得ざるに至れり。此の時に於ける人情風俗は如何なるべきか。一旦驕奢に馴れたる士民は世の不景氣なるにつれて俄に勤儉ならんことの難かりしは數の免れざるところ、究乏の狀態は愈、其の極にまで馳せ節を屈して阿諛諂佞を事とするものもあるに及びぬ。されば綱吉將軍又は吉宗將軍の如き率先して之れが改善を企圖せしも遂に其の功を奏するに至らず執政松平定信又は水野忠邦の如きは之れが矯正を努めしかども功を見ずしてますます其の風を増進せるを認むるのみ。其の後國書の研究はゆくりな

く勤王論を喚起し又偶々米艦浦賀に來たるに逢着し次いで攘夷開港の争ひとなりて人心の恟々たるや懶眠漸く覺めて尙武の氣再び興起せり。かくて士民の風俗亦稍淳樸に復するを得たり。

此の時代の初めには士民尙武の氣に富めりし故に武術を攻究する暇には遊戯も犬追物、流鏑馬、笠懸、鷹狩等の勇壯なるを回復して質樸なるを好みしが元祿以降奢侈優柔を旨とする頃となりては多くは室内に於いてする優美なるもの行はれき。茶の湯、插花、詩歌合、連俳の會の如きは干戈騷劇の際にも行はれたれば云はず歌舞音曲等に關する諸興行の此の時代ほど著るく發達して其の種類が多かりし事眞に前古無比なり。されども行遊の樂も豈に又絶えて無しとせんや。江戸の行遊は上野の花見殊に賑はしく向島飛鳥山の櫻狩り又之れに譲らず梅には龜井戸の臥龍梅、白毘の新梅屋敷あり兩國橋の夕涼は今世に残れるにても大方知るべし淺草川の舟遊び三又の江の月に棹すも趣からず、さては待乳山の雪見に風流を銜ふもありけり。京都大坂はたそれ〴〵遊覽の勝地に富みて就中嵯峨御室、四條、高雄、丸山、天滿の社こそ最も世に高かり。四季の行遊には孰れも歌舞音曲の興を打

添へ衣服殊に綺羅を飾りて頗る優美妖艶の態を競ひ一日に數千金を費すもありき。さはれ元祿の頃より世に最も豪華の場處として世に聞こえたるは遊里に若くものこそなかりけれ。抑此の時代の初めには戰國の餘風として彼の時代の遺物たる男色の弊風盛に行はれしが元祿以降は猶ほ野郎と唱へて稀に其を鬪ぐものありし外、遊女の春色を賣るもの時世の浮華淫逸なるに従ひて愈多くなりき。而して此の時代の初めには諸般の流行専ら士流の間より起こりしに後には歌舞伎役者と遊女野郎とが其の魁を爲せりきと知らば如何に風俗人心の變遷推移の顯著なりしかを想察するに足るべし。

美術は世上舉りて豪華を競ひしだけ其の嗜好に應ずる必要より一般に趣からざる進歩を爲したり。建築の宏壯なるは日光廟の金壁燦然たる殿舎について其の一斑を卜すべく畫法の一進歩は七十二間の間に巨松一株を畫きて猶ほ神を傳たへたりといふ探幽の手腕によりても窺ふを得ん。其の外陶器漆器彫刻の類皆それ〴〵の發達を爲さざるはなかりき。苑藝には京都に修學院、桂別業、江戸に吹上の苑、濱御殿の苑に意匠を凝らせるは勿論のことなり諸侯にも水戸侯の後樂園、尾



張侯の外山園、松浦侯の蓬萊園、長門侯の鎮海園、桑名侯の浴恩園、滑口侯の借樂園等就中人目を驚かし雅致言語に絶せり。かくて諸般の藝術産業また進歩達發の見えざりしは無く世の中にあるべき限りは殆ど此の時代に盡くされしかと思はれける。特に猿樂、能、狂言等の發達して成れりし歌舞伎芝居の非常に流行せしとは忘るべからざるなり。

宗教は稍、舊株を守りたる觀ありしに拘はらず又此の時代ほど諸種を網羅して而も人心の間に普及したることなかるべし。まづ佛教は天海及び崇傳と呼べる僧侶が徳川氏の創業に與りて力ありしより將軍家康の尊奉厚かりしに加へて寛永の頃耶蘇教を嚴禁せしより遂に國教の如くなりなき。そもく、耶蘇教は是れより先秀吉の禁制するところとなりしかど其の頃は海外貿易を認許せしより其の禁制も自然に寛なりしかば猶ほ其の跡を絶滅する事能はざりしに慶長十六年九州の耶蘇教徒幕府を轉覆せんとする由訴ふるものありければ徳川氏之れを嚴禁して宣教師等を南洋に放逐せり。然るに寛永十四年天草の浪人天草四郎時貞を主師とし耶蘇教を奉じて亂を起こし頗る横暴を逞うしぬ。此の亂は年を除えて

平ぎしが幕府いよく、耶蘇教の政治的野心を有するを疑ひ重ねて嚴禁し併せて全國の士民は必ず佛教の一宗に歸依せざるべからずと命じたり。維新前まで宗門帳として族籍生死嫁娶等を記載せる今の戸籍簿めくものを各寺院に藏せりしは此の時改宗の證として寺手形及び宗旨手形を出だしに淵源すといへり。當時各宗寺院の多かりしこと四十六萬九千九百三十四箇所に及び法相、真言、律、天台、禪(臨濟、曹洞)の二派(黃蘗、淨土、真宗)一向、融通念佛、時、日蓮(法華)等の諸宗派ありき。黃蘗宗は禪宗より脱化せし一宗派にして此の時代に至りて始めて我が國に行はれたるものなり。是等諸宗の内一向宗は其の教理平易にして俚耳に入りやすきを以て最も世上に行はれ尾濃越の地に信徒甚だ多かり。また淨土宗は徳川氏の創業を輔けて功あり歴代將軍の尊奉するところとなりしより信徒いよく、加はり殆ど一向宗と相若けり。日蓮宗は相武總房の諸州に信徒少からず黃蘗禪宗等はた歸依するもの多かりき。かくて年經るに隨ひては佛教の人心に浸染すること著るく全國何人も宗旨なきものなきのみならず何れの家にも佛壇を設けて本尊佛を安置し並びに父祖の位牌を据えて朝夕禮拜祈禱し又は之れを拜せんがために

宗門寺若しくは墓地に詣づるも常なり。靈佛名利を拜せんとして遠く杖にまかせて廻國するもありけり。是れ中にはさのみの信仰なくして専ら名譽を得んがために企てたるものも往々ありしや論なし。

かくの如く佛教は隆盛にして信徒多かるに隨ひ僧侶は却つて安逸に流れて高僧あることなく唯此の時代の初つ方に多少の智識出でたる外一般破戒無耻なるもの多かりき。眞宗以外の僧侶にして妻妾を蓄へ酒に浸り肉に飽けるは未だいふに足らず僧侶の中には信徒の無學なるを機として無學なる靈驗奇跡を説いて淨財の喜捨を詐取して己れが遊蕩の費に充て長袖翻調として遊里の月にあこがるゝもありきとなん。常期又別に普化宗と唱ふる半俗半僧の一派武士道をもて宗法とし托鉢修行して諸國を巡遊するものもありき。身には袈裟を纏へども僧衣を着せず短刀を帯び頭上には願を没するほどの天蓋笠を戴き手に尺八を携ふ世に之れを虛無僧といへり。幕府之れを利用して國事の秘密探偵の用に供し全國往來の自由を許し宿泊渡船の特權を附與せしが後には彼等も亦次第に横暴を逞うして良民の害となると少からざりき。

佛教と並び行はれて又隆昌を極めたるを神道とす。神道は曾ても述べたる如く早く安平の時代に神佛混合の姿となりて絶えず行はれしが其の隆昌を來たしたる端緒は室町の時代延徳の頃卜部の家と吉田兼俱といへるもの唯一神道説を唱へて全く佛教と分離したる一派を創始せるに基けり。寛文延寶の交吉川惟足といふもの一魚商より出で、吉田家の支脈たる萩原兼朝に學びて一派を起こし大いに世に弘まりぬ。同じ頃又伊勢外宮の神宮出口延佳あり山崎闇齋はた前後し出で同じく神道を唱へき。世に垂加派といふ一派は闇齋の唱道せるものなり。されは是等の諸派は未だ全く儒佛を離れて獨立なる説朋を得ざるものなりしに古昔の研鑽盛なりしにつれ本居宣長平田篤胤出づるに及びて我が國太古の神道再び明らかにかつ盛大を致したり。都市町村といはず一町一村さて一郷には必ず鎮守の社ありて産土神を祭るのみならず何れの家にも佛壇のあるが如く一家として神棚の設けあらざるはなかりけり。かゝれば又靈社大祠を巡拜せんとて廻國するものは靈佛互利に養せんとして巡禮するものあるに異ならず就中伊勢參宮駿河の富士詣相摸の大山詣信濃の御嶽贖岐の金毘羅詣等の盛なりし事言

に絶せり。其の他當期の士民が天地山川禽獸草木さては無機物に對してさまざまの迷信を有せりしは一般の狀態なりき。

文教は家康將軍天下を治むるに當りて治國平天下の法は主として儒學に存するを知り大いに之れが獎勵を務められしかば著るく振起せり。將軍が文教振起のためにつくせるもの四あり古書の搜索、書籍の刊行、儒者の任用、學校の設立是れなり。將軍が當時兵亂の餘弊を承け古書の散佚したるを憂ひて慶長元和の交凡十七年の間に刊行せしもの『日本書紀』『貞觀政要』『東鑑』『周易』『孔子家語』『武經七書』『群書治要』『大藏一覽』等あり。之れが印刷には木製又は銅製の活字版を用ひたり。爾來歷代の將軍も亦家康將軍の意志を繼ぎ古書を蒐集し而して之れを刊行するを怠らざりき。寛永年間に至り江戸城内に紅葉山文庫を設けたるは即ち是れ亦家康將軍の素志に基きたるなり。『寛永諸家系圖傳』『本朝通鑑』又此の將軍の意より出で當時の幕府林信勝に命じて著はさしめたるもの、權門勢家に關する記事には多少の誤謬あり材料はた杜撰なるものありと雖も大著述として見るべし。學校を設けて孔孟の道を教授せしは早く慶長六年に家康將軍が山城の伏見に起

こしゝを始とす。同十九年又京師に増設せり。寛永七年に林羅山私に江戸上野忍岡の別業に弘文館といふ學舎を建てき。同十年徳川義直こゝに先聖殿といふを建て、孔子の靈を祭りぬ。元祿三年綱吉將軍之れを本郷湯島に移して大成殿と號し祭田學料を給し傍に學舎を設けて大いに生徒を養成せしめつ世之れを昌平校といへり。寛政中に至り改めて官學となし學制を擴張し舊制に幕臣ならざる者の入學を許さしりしを此の時より士庶を問はず並ひに就いて學ばしめたり。天保年間に又京師に學習所を設けて統袴の子弟を教養せり。かゝれば當代に於いて諸藩の官學に倣ひて學校を設けたるもの甚だ多かり中にも米澤の興讓館、備前の關谷館、加賀及び尾張の明倫館、佐賀の弘道館、熊本の時習館、鹿兒島の造士館、萩の明倫館、伊勢の有道館、佐倉の成徳書院、水戸の弘道館、會津の日新館、仙臺の養賢堂等最も其の名聞こえたり。其の學科は専ら漢籍を修めて傍ら國史に及ぶを常とせり。藩學の外又私立には京都に伊藤仁齋の初始せる堀河塾、大坂に中井養庵の建設せる懷徳書院等其の大なるものなりき。堀川塾の盛昌なる生徒の數一時三千に盈ち日本全國中飛驒壹岐佐渡の外其の門に入らざる國なかりきとむ。當

時の學派には朱子學王陽學古學折衷學等の別ありしが幕府専ら朱子學を以て科試にあてしかば斯學最も流行せり。さて以上は主として高等の學校なりしが此の外諸國の儒者概ね家塾ありて多少の子弟を教養せるも多かりき。特に石田勘平、手島堵庵、中島道二等の一丁字なき庶人を集めて修身齊家の要旨を説きたると一般の兒童を訓育せる寺子屋といふもの、盛なりしは當代に於ける教育の發達顯著なりしを証言するに足るべし。享保中江戸市中のみにて寺子屋の數實に八百箇所、全國に存在せしもの、枚舉に遑わらざりしは云ふを要せじ。是等の學校は習字を旨とするも其の中には又國語町盡名字盡消息文及び『庭訓往來』『商賈往來』『番匠往來』等の如き諸科を含みたり。故に此の時代の教育は儒教の道徳主義を以て基礎となし實業に適應すべき諸科を不完全ながらも教養したるものなり。師弟の關係の親密にして禮ありし事又特に當代の美風として記載しおくべき假値ありと信ず。

西洋學は家光將軍西洋書籍の輸入を嚴禁せしより以來彼の事情を知るは和蘭船の長崎に來るがために置きたる通詞の傳聞若しくは彼の船員等の説話に依るのみなりしが享保年中吉宗將軍彼の學藝の利益あるを知り宗教に關するもの、外洋書輸入の禁を解き延享年間青木文藏(昆陽)に命じて蘭書を研究せしめたるを始とす。是れより先新井君美(白石)『西洋紀聞』『采覽異言』等を著はして歐西の事情を述べし事ありと雖も彼れは漂着の外國人若しくは和蘭船員等に就き其の國情を尋求して傳聞のままを記録せしのみ。洋書解禁の令出で、より之れが研究に従事するもの漸く多かり安永の頃醫師前野良澤(蘭化)杉田玄白(鵜齋)桂川甫周(月地)中川淳庵等最も著名なり相會して『解體新書』の翻譯に従事し三年にして成りぬ。之れを蘭書翻譯の嚆矢とす。甫周また『魯西亞志』『北極略』『万国圖説』を著述して海外の事情を世に明らかにし良澤『和蘭文法』『蘭譯箋助』『助語參考』を著はし其の門下生に大槻玄澤といふもの又尋いて『蘭學階梯』を公にしき。世人之れよりますます蘭書の讀むべきを知りて斯學の攻究一層進みぬ。玄澤の門に稻村三伯、山村才助、橋本宗吉、安岡玄真ありき。三伯は『波留麻和解』といへる對譯辭書を著はし玄真は『醫範提綱』を譯述して醫術の法を説き才助また増譯采覽異言を著はして世の志士を刺激せり。さる程に蘭學は其の所説明確精微にして從來我が國に傳はれる

學術の比にあらざりしを以て世人の注意を惹くこと著るかりしが此の際偶、他の洋學の研究を促すべき機會こそ起こりけれ。機會とは何ぞ文化年間魯英の船展、我が邊海に出沒して標掠を爲ししより幕府其の虞に應じて處理せんがために彼の國々の言語に通じ事情を明らかにするものゝ必要を生じて之れが研究を譯官中の才學あるものに命じたること即ち是れなり。されど是等語學の研究は未だ俄に蘭學の盛大なるに及ばざりしや論なし。文化八年幕府更に蕃書和解方を置き玄澤等をして蘭書に翻譯に従事せしめき。當時學者の著名なるものに坪井信道、箕作阮甫、青木周彌、川本幸民、緒方洪庵、杉田成卿、高良齋、伊東玄朴、戸塚靜海、伊藤圭介、竹内玄同、高野長英、高橋作左工門、佐久間修理、高島秋帆、江戸太郎左衛門等ありき。蘭學始めは醫學に起程せしと雖も今は天文、地理、理化、動植物、金石等の學より兵學、砲術として興らざるはなく遂に思想上にまで影響し一轉して政事上の一勢力となり引いて徳川氏喪權の一大原因を爲すに至れり。

要するに此の時代の初期は戰國の餘勢を享けて士民孰れも殺伐剛毅を尙ぶ風習なりしも久しき泰平の世は幾何ならずして柔弱淫逸の俗に軟化せしめ爾來幾多の消長を経て維新の時に及びぬ。各種の職業は各種の社會を作りて而も其の種類の雜多なる前古に比なく諸般の學術はた上下に普及せり。殊に宗教と儒學と國學とは人心を感化し主として士民の言動を支配せしものから後には洋學亦一大影響を人々に與へたり。茲に各種の社會貴賤上下を問はず皆それの文學を有して而も是等複雜なる社會の現象によりて影響せられたりとせば其の文學の有すべき性質は如何にあるべきか。そもく又文學が是等社會の上に及ぼせる影響は如何なりしか。予輩は例に従ひ更に章を分かち節を追ひて之れが討究を試みんとす。

### 第三章 歌謡

和歌の復興 國學の研究 古書 of 註釋 狂歌  
俳諧の變遷 其の流行

當代の初期に在りては和歌は單に室町時代の餘風を繼承して些の變革進歩なく全然極衰の域に彷徨したりき。蓋し當時の歌人と呼ばれしものは大方彼の二條

冷泉等の陳腐なる秘事口傳を墨守せる輩なりしのみ。其が中に細川幽齋、木下長嘯子といふものあり共に其の身武人にして歌學に通達せるものなりしが殊に長嘯子は野に在りて只管ら斯道に従事せしかば從來専ら堂上方の占有なりし和歌を導きて平民社會のものたらしむる緒を開きぬ。尋いで元祿の頃難波に下河邊長流、僧契沖あり『萬葉』『古今』等の古書を研究し堂上方の和歌が荒唐無稽なる規則に拘泥して他を許さざるを慨嘆して歌界に改革の旗幟を翻しき。此の頃北村季吟、江戸にあり季吟の本領は和歌にあらずといへども其の著述せる中古の歌集及び物語類の註釋は世人をして國語の智識を得しめたると同時に和歌改革の機運を助成せり。長流、契沖等の詠歌は未だ『萬葉』風の姿情を得ざりしも二條、冷泉等の師範家に入らせる歌人とはおのづから其の撰を異にして優に古今以下の和歌に私淑するところあらんとす。享保元文の頃荷田春滿、加茂真淵等出づるに及びて改革の機運こゝに其の功を告げ和歌の姿情古に復し歌界の弊風全く打破せられて不羈自在なるものとなりぬ。是れより和歌の姿情或は『萬葉』の質樸なる古風を撰するものと『古今』以下『新古今』の華麗なる近調を旨とするものと並存せり。志

かるに幕末文化文政の交香川景樹、井上文雄等出で、名手の聞こえ高かりしが想は古の質樸なるを探り詞は今の平易なるを尙ぶ風ありしより世靡然として之れに赴き以て歌界は又こゝに一新紀元を開くに至れり。

長歌は中古一たび衰微して以來振はざりしが長流等の亦再興するところとなりぬ而も多くは『古今集』などの模倣に止まりて到底見るべきものなし。真淵又は千蔭の詠の如き風躰賦に巧なりしも猶ほ單調無氣力なるを免れず况や其の他の彼等に及ばざりしものゝをや。

當代に於ける著名なる歌人及び其の重なる著書左の如し。

細川幽齋(二一九二—二二七〇)『伊勢物語闡疑抄』『百人一首抄』『源氏物語辨』『新古今

集鈔』『歌仙解難抄』『名所類字和歌集』『詠歌大概抄』『耳底記』『座右』『細川幽齋家集』

木下長嘯子(二二三九—二三〇九)『東山山家記』『四生歌合』『うなひ松』『戀の歌合』『翠

白集』

下河邊長流(二二八三—二三四五)『續歌林其材』『枕詞燭明抄』『林葉果隱集』『萬葉集名

寄』『津水和歌集』『晚花集』

僧契冲(二三〇〇—二三六一)『萬葉代匠記』『厚顔抄』『勢昭臆斷』『勝地吐憤篇』『和宇正

謄抄』『同要略』『圓珠庵雜記』『同雜々記』『新勅撰集抄』『百人一首收親抄』『源住拾遺』

『古今餘材抄』『漫吟集』

荷田春滿(二三三〇—二三九六)『伊勢物語童子問』『萬葉集童蒙抄』『春葉集』

有賀長伯(二三二一—二三九七)『歌枕秋寐覺』『和歌八重垣』『濱の真砂』『和歌籠の歴』

『和歌初學式』『長伯集』

加茂真滿(二三五七—二四二九)『萬葉考』『祝詞考』『冠辭考』『國志考』『歌意考』『文意考』

『源氏物語新釋』『伊勢物語古意』『古今集打聽』『岡部日記』『真淵家集』

富士谷成章(二三九八—二四三九)『あゆひ抄』『おとし抄』『七林七百首』『六運圖略』『北

邊家集』

小澤蘆庵(二三九三—二四六一)『袖中和歌六帖』『ふるの中途』『千首部類』『振分裝』『六

帖詠藻』

加藤千蔭(二三九五—二四六八)『ゆきおひぶり』『萬葉新探百首』『萬葉集略解』『香取日

記』『うけらば花』

村田春海(二四〇六—二四七一)『假字拾要』『和歌大要』『作文道弊』『歌苑古題類抄』『琴

後集』

清水滋臣(二四三六—二四八四)『語林類葉』『習根集』『泊々筆話』『泊々舎集』

香川景樹(二四三〇—二五〇三)『古今集正淺』『土佐日記創見』『中空日記』『新學異見』

『桂園一枝』『桂園集』『桂園遺文』

井上文雄(二四六〇—二五三一)『冠註大和物語』『伊勢の家裏』『調鷗集』『文雄翁家集』

右に見るたる家集の外和歌の集にて有名なるものに『類題草野集』あり『類題願玉集』あり當代歌人の詠歌を撰録せるものなり。

通例の和歌の外に又一種狂歌といふものありて早く寛永の頃より世に出でき。此の彼れに異なるところは俗語を交へ主として滑稽の想を歌ひ又諷刺の意を寓するにありき。されども其の滑稽は大方有名なる古歌を轉換したるものならずば地口に類する趣あるのみにて規模小なるを免れず。諷刺はた然り。され其の着想の意外なるは往々讀者をして捧腹せしむ。狂歌師の最も世に聞こえたるは

朱樂菅江(二三九八—二四五八)『大抵御覽狂歌大體』『狂歌すまひ草』『古今馬鹿集』

唐衣橋洲(二四〇三—二四六二)

大屋裏住(二三九四—二四七〇)

手柄岡持(別名明誠堂喜三次)二三九五—二四七三)『鏡入七人化粧』『太平記万八講釋』

『簡入道仙沖』『新風俗志』『氣のくすり』(以上小説)『我面白』

四方赤良(大田蜀山又南畝)二四〇九—二四八三)『徳和歌後万載集』『狂歌才者集』『千紫』

万紅『浮世繪類考』『假名世説』『一話一言』『香園文集』『蜀山百首』

北川眞顔(二四一三—二四八九)

宿屋飯盛(石川雅忍)二四一三—二四九〇)『狂歌百人一首』『萬代狂歌集』『殿覺のすさび』

『源註餘瀟』『雅言集覽』

等とす。此の外森羅万象(二四二二—二四九一)橋庵田鶴丸(二四一九—二四九五)加茂季鷹(二四一一—二五〇二)等なほ多かりきと雖もさまでとはとて省きつ所詮赤良、眞顔、飯盛等に及ばざりしなり。狂歌の集に又『狂歌題材抄』『狂歌すまひ草』『狂歌武射志風流』等あり以上に列擧せる狂歌師の詠を窺ふべし。

連歌は室町時代の末造に至り一轉して俳諧となりし事既に其の期の第三章に於いて之れを説きたり。彼の宗鑑と守武とは本歌調の連歌が宗祇以後錯雜なる法則の中に拘束せらるゝを厭ひて俳諧調を主唱し世の歡迎するところとなりしが此の時代に入り幾多古文學上の智識と天稟の偉才とを以て寛正年間に

松永貞徳(二三三一—二三三三)『澁川』『湘攄』『御座』『百韻白註』『天水抄』等

といふもの出で、此の機に乗せしかば俳壇之れがために一時風靡せられき。貞門の俳諧は宗鑑のそれの如く滑稽奇智を弄するものにあらず頗る優美にして雅致に富めるもの而も思想單純なり。俳句に於いても亦然り。世に之れを古風といふ。其の高弟に

野々口立圃(二二六〇—二三二九)『花火草』『道普九百韻』『空塵』『俳諧万句集』『若狐』

『徳万巻』『平句集』『瀆疾』『發句帳』等

安原貞室(二二七〇—二三三三)『片言なほし』『玉海集』『氷室守』等

山本西武(二二六六—二三三八)『慶筑波集』『萩花集』『砂金袋』『砂金袋後集』等

松江重頼(二二六七—二三四〇)『犬子集』『毛吹草』『韻子』等



高瀬梅盛(二二八一—二三五九)『口眞似草』『鷗鷗草』『便船集』『類船集』等  
北村季吟(二二八八—二三六五)『山の井』『積山の井』『新編筑波集』『増山の井』『十合集』

『諸國獨吟集』『埋木集』等

等殊に願はれき。其頃別に杉田望一(二二〇八—二二九〇)といふ者守武の俳風を慕ひて伊勢に起り後年に於ける伊勢風勃興の礎を築きぬ。かくて寛文の頃  
西山宗因(二二六五—二三四二)『千句集』『釋教百韵』『五百韵』『天滿千句』

といふもの古風の俳諧に對して一派を立て名づけて談林風といへり。詞姿想共に貞門の單純なるに似ず豊富自在にして飄逸能く人生の秘奥を穿つは宗因の最も得意とするところなりき。當時古風の單純なるに倦厭せる俳人等の其の門に入るもの陸續踵を接せり。中に就いて

井原西鶴(二三〇二—二三五三)『大矢敷』『兩吟一日千句』『後大矢敷』『俳諧石車』等

田代松意(生死未詳)『談林十百韵』『太夫櫻』『軒端の俗言』等

岡西惟中(二二九九—二三五二)『破邪顯正返答』『近來俳諧風林抄』等

等其の名尙ほ今に高かり。談林の徒多くは大坂に住せしが寛文の末松意江戸に

下りて其の俳風を傳へたるより江戸にも此の風の俳諧あるに至りぬ。かくて古風の俳諧もなほ全く絶えたるにあらざりしかば兩派の争端はしなく起りしも終に勝利は談林のものとなりて爾來其の風殆ど全國を掩へりき。されども談林の俳風も漸く其の末派者流の誤解するところとなり主として世の嗜好に投じて喝采を博せんとする極狂言綺語に類するものとなりしより其の辭調蕪雜を厭ひて竊に他を望むものもあるに至れり。これを天和貞享の交とす。此の時に當り松尾桃青(芭蕉)(二三〇三—二三五四)『貝おほひ』『猿蓑』『櫻蓑』『ひさこ』『慶の小文』

『奥の細道』等

深遠偉絶の才を以て初め貞門より中ごろ談林に入り遂に一新派を開きぬ。蕉風正風といふものは是れなり。其の俳意の幽玄閑寂を主とせること有名なる古池やの一句にても知らるべし。其の頃攝州伊丹の地にも談林の俳人宗旦を経て

上島鬼貫(二三二一—二三九八)『惡能錄』『花實集』『寸の字集』『獨言』『江戸筏』

『老の癡癡』『獨吟百韵』等

談林を離れて鬼貫風とて稍蕉風と近似せる幽奥自然の一派を唱へし其の詩才芭

蕉に及ばず其の門下は蕉門の多士濟々たるに若かさりしを以て鬼貫の歿後ま  
た聞こえずなれり。實に蕉門には全国各地に住して名あるもの多かりき。

越智越人(二三六二死)『不猫陀』(其の句は『俳諧七部集』及び『俳  
諧故人五百題』等に多く出でたり)

向井去來(二三〇三—二三六四)『旅麻論』(其の句『俳諧七部集』及び『俳  
諧人五百題』等に出でたり)

内藤文章(二三三三—三二六四)『麻草』『文章句集』(後人の集め)

榎本其角(二二二—二二六六)『田舎句合』『新二百員』『虚栗』『盛集』『新山家』『續虚栗』

『猿蓑集』『枯尾花』『句兄弟』等

服部嵐雪(二三一四—二三六七)『俳諧社撰集』『そのはまゆふ』『若菜』等

河合曾良(二三六九死)『曾良の句集あるを聞かぬ』其の句は『俳諧七  
部集』『俳諧故人五百題』等に多く出でたり

森川許六(二二二—二二七五)『韻鑑』『俳諧問答』『宇陀法師』『風俗文選』『十三歌仙』『歴  
代滑稽傳』等

立花北枝(二三七八死)『北枝發句集』(後人の集め)

各務支考(二三二五—二三九二)『菖の松原』『笈日記』『草枕』『俳諧十論』『西華集』『泉日  
記』『東華集』『白陀羅尼』『古今抄』『和漢文藻』『東華式』『新選大和詞』等

志田野坡(二三三—二四〇〇)『和便集』『八鳥』

等は世に所謂蕉門の十哲と呼ばるゝもの高足の弟子なりき。其の他尙ほ岩田涼  
菴(二三七七死)の伊勢風、に於ける天野桃隣(二二九九—二三七九)の太白堂、に於ける  
山口素堂(二三〇二—二三七六)の葛飾風、に於ける大淀三千風(生死未詳)の鴨立庵に  
於けるは、さながら其角の江戸坐嵐雪の雪中庵、支考の美濃派に於けるか如く孰れ  
も其の名聲俳壇に藉甚せり。是等の弟子皆々それ〴〵の地にありて許多の門人  
を有します〴〵蕉風の俳諧を世に擴めつ全國の俳風こゝに於いて悉く蕉風の一  
派に歸せり。彼の古風若しくは談林の徒の如きなほ稀に無きにあらずといへど  
も只其の名を冒すのみて實は蕉風の流れを汲むものなりき。さはれ蕉風の俳諧  
も亦其の繁盛の極は幾何ならずして俗了し幽玄閑寂の俳想は全く謎の如きもの  
となり。安永天明の頃

三浦榜頁(二三八七—二四四〇)『わがいと』『石をある』『櫻良七部集』(後人の集め)

谷口蕪村(二三五六—二四四三)『桃李集』『蕪村句集』(後人の集め)『蕪村七部集』(全)

大島蓼太(二三六八—二四四七)『十二歌仙』『芭蕉庵再興集』『七部抄』『附合小銃』『蓼太

句集 (後人の集め)

加舎白雉(二三九九—二四五二)『發句五百題』『俳諧寂乘』『白雉句集』(後人の集め)

加藤曉暈(二三九—二四五二)『熱田三歌仙』『風羅念佛』『曉暈七部集』(後人の集め)

高桑蘭更(二三八七—二四五九)『俳諧新々式』『露まろけ』『俳諧世説』『蘭更句集』(後人の集め)

の徒當時俳風の日非なるを慨嘆して刷新を謀り稍古に復する觀ありしが『新古今』時代の華麗巧緻なるは『古今』時代の華實並有せるに及ばざりし如く到底蕉風創始の其のところに及ばざること遠かりき。横井也有(二三六二—二四四三)及び女流

俳家加賀の千代(二三六二—二四三四)又當時の名家として數へられたり。文化文政の交は俳壇中興の後を承けて尙ほ其の餘勢を維持するに足り天保の頃

成田蒼虬(三四二—二五〇二)『蒼虬句集』(後人の集め)

櫻井梅室(二四二九—二五一二)『梅室雨吟』『木葉百韻』『梅室句集』

田川鳳朗(三四二—二五〇五)『自然堂千句』『風則句集』(後人の集め)

時の三俳人として特に稱せられき。まかも天保時代の中興時代に及ばざりしこ

と恰も中興時代の蕉風當時に若かさりしに似たり。天保以後に於ける俳壇の俗了は最早此に詳論する價值なき程に立ち至りたりき。蓋し俳壇の消長も亦他の文學と共に政事上の變動に隨伴せりしなり。さて當代の歌人は元來國學研究の自然の結果として其の地を得たるもの大方なれば古雅なる擬古體の散文を能くするもの多かりしは勿論の事なるが狂歌師には滑稽諧謔なる狂文體あり俳人にも高古幽玄なる俳文體の散文ありき。是等は孰れも歌界に棲息せる文學者の作として多少の詩趣を帶ぶる風ありて誦すべきもの多かり。俳文殊に然りとす。

### 第四章 散文

漢學者及び國學者 淨瑠璃作者及び狂言作者 小説

江戸時代に於ける散文界は富贖にして殆ど散文學の有らゆるすべての種類をつくしぬ。すなはち漢學者は漢語交りの文體を以て専ら儒教主義を述ぶるあり國學者は古體の文章を以て我が古學の旨を發揮せるあり其の他戯曲小説俳文狂文等種々ありき。江戸時代の散文界を譬ふれば雪に埋れし春草の今や時を得て愈々

茂りゆくらんさまに似たりけり。

そも漢學が歷代將軍の獎勵を承けて隆盛を極めたりし事は第貳章に於いて既に述べたるが如し。然れども漢文を讀み得るは學者の事にして一般の庶民にありては到底解すべくもあらねば孔孟の教を弘布するに當り刻下の必要に迫られて漢學者も一種の國文を作りたりき。假名に漢學漢語を混和せる文章即ち是れなり。

漢學者は元來國學を修めしにはあらざれども博く本邦の古典に涉りしものありしだけに其の文のつから雅正なる國文の一跡たるに適せり。若しそれ其の文に文法上の疵瑕ありしは専門の國學者さへ文法學未熟の頃には不合格の文ありし程なれば深く咎むべきにあらじ。縱横自在なる筆勢跌宕流麗なる文跡もて儒教の奧儀を闡明せんとするところ却つて國學者の文のまゝ冗長なるに優るものあるを見るべし。實に和漢に於ける各文章の英を集め華を拾ひて渾成せる文章は我邦今後に於ける普通文の最好なる模範にあらざるなきか。漢學者にして散文家の聞こえ高きもの左の如し。

藤原愷窩(二二二一—二二七九)『千代も草』『愷窩文集』等

林羅山(二二四三—二三一七)『大學和字鈔』『徒然草野稿』『羅山文集』等

熊澤蕃山(二二七九—二三五一)『集義和書』『集義外書』『大學或問』『三輪物語』等

伊藤仁齋(二二八七—二三六五)『中庸發揮』『童子問』『文集』等

雨森芳洲(二二八一—二三六八)『たはれ草』『橋樑茶話』『全文集』等

貝原益軒(二二九〇—二三七四)『家道訓』『養子訓』『樂訓』『童子訓』『初學訓』『大和俗訓』

『女大學』『京めぐり』『大和めぐり』『岐蘇路記』『筑前蝦風土記』等

新井君美(二三一七—二三八五)『藩翰體』『讀史餘論』『折焚柴の記』『古史通』『西洋紀聞』

『采覽異言』『阿蘭陀風土記』『本朝軍記考』『琉球事略』『東雅』等

荻生徂徠(二三二六—二三八八)『孫子國字解』『學庫解』『政談』『南留別志』等

室鳩巢(二三一八—二三九四)『駿台雜話』『瓜集小説』『六諭衍義和解』等

伊藤東涯(二三三〇—二三九六)『橋樑小錄』『乘烟談』『古學指要』『東涯漫筆』等

太宰春臺(二三四〇—二四〇七)『經濟錄』『獨語』『春臺文集』等

湯淺常山(二三六八—二四四一)『常山紀談』『文合雜記』『常山樵筆錄』等

此の外尙ほ中井養庵、柳澤淇園等また多少の著作をもつて世に名ありき。天明寛政以降には漢學者としては随分有名なるものありきと雖も孰れも漢文をのみ文章と心得る輩のみなりしかば和漢混和體の散文家として掲ぐべきもの甚だ少し。只わづかに中井竹山、成島司直、太田錦城、朝川善庵等に二三の作ありしのみ。國學者の文章は和歌とあなじく長流、契沖等を経て眞淵に至りて愈々隆盛となりたり。其の散文の種類には歴史あり日記紀行あり隨筆注釋考證等さまざまありと雖も其の文體大方はわざと中古の文體を摸すると多く實用には如何はしきところあるを免れず。思想も亦妄りに古を墨守する傾向ありて時世に遠かる趣見ゆめり。さはいへば優美葩麗の文體は國學者の作に於いて始めて見るべかりしものなり。語法の整頓及び國史古代制度の研究は後世の學界に裨益するどころ尠からざりき。前章和歌の條に掲げたる人々は大概散文家として見るも一廉の名あるものなりしが尙ほ當代の大家として最も優れたるものに

本居宣長(二三九〇—二四六一)『古事記傳』『玉くしげ』『歷朝詔詞解』『源氏玉の小櫛』

『古今集選鏡』『萬葉集玉の小櫛』『草庵集玉等』『敷戒概言』『初山踏』『神代正語』『玉

勝間』『菅笠日記』『鈴屋文集』等

伴 蒿 蹊(二三九三—二四六六)『國文世々の跡』『辭文直論』『門田の早苗』『近世時人傳』

『閑田新筆』『閑田次筆』『閑田文章』『閑田詠草』等

平田篤胤(二四三六—二五〇三)『古史傳』『古史成文』『神字日文傳』『古史徵』『歌道大意』

『古道大意』『山定笑語』『悟道大意』『玉露』等

伴信友(二四二三—二五〇六)『比古婆衣』『假字本末』『殘櫻記』『長等の山風』等

小山田與清(二四三五—二五〇七)『掃香漫筆』『相馬日記』『八洲文藻』『十六夜日記殘月

抄』等

萩原廣道(二四七三—二五二三)『源氏物語評釋』『本學提綱』『小夜時雨』『心の種』『保辭

辨』等

等なりとす。

戯曲なる淨瑠璃並びに演劇脚本の進歩に至りては殆ど古今獨歩の觀ありき。淨瑠璃は是れより先後陽成天皇の頃に小野小通といひしもの、創始せるものなりといひ傳へたれど如何にや。此の時代に至りては寛文延寶の頃岡清兵衛(二三四

六段といふ者世に所謂金平本とて怪力絶倫なる勇士の物語を浄瑠璃に結構して節譜を附したるが世に行はれたるを進歩の緒とす。次いで貞享元祿の交

近松門左衛門(二三一三一三三八四)『山世景道』『曾根崎心中』『伊達染手綱』『松樹三重

惟子』『堀川夜之鼓』『國姓爺合戦』『心中重井筒』『蟬丸』『露女五枚羽子板』『夕霧阿波

鳴門』『双生隅田川』『心中天網島』『曾我合番山』『女殺油地獄』『冥途飛脚』『心中背庚

中』等

非凡の天才を以て大坂の地に出づるに及び從來のに謡曲を參酌して五段ものとし首尾貫通せる浄瑠璃茲に大成せり。當時の浄瑠璃は専ら操人形を演ずるに當りて語りたるものなりといふ。近松の作大に好評を博せしかば爾來浄瑠璃を作るもの之れに倣はざるはなきに至れり。元文寛保より寶曆明和にかけては

竹田出雲(二四〇〇死)『假名手木忠臣藏』『菅原傳授手習鑑』『嵯峨千本櫻』『大塔宮囃鑑』

『蘆屋道満大内鑑』『小栗判官車街道』等以上大概小山出雲松洛、千柳、和吉、千四と合作なり

並木千柳(二三五三一二四〇〇)『二谷敏軍記』『後三年奥州軍記』『本朝檀特山』『藤秀那

儀系圖』等以上概ね丈助、蛙文、紫助等の合作に係る

紀海音(二四〇七歿)『末廣十二段』『八百屋セ七歌祭文』『鎌倉三代記』『日本傾城始』

心中ニッ腹帯』等

三好松洛(生死未詳)『御所櫻堀河夜討』『ひらかな盛衰記』『姫子松子日の遊』『由良淡千

軒長者』等

菅專助(生死未詳)『攝州合邦辻』『染摸様妹背の門松』『伊達娘戀緋鹿子』等

平賀鳩溪(二四三九歿)『神靈矢口渡』『榎松葉相生源氏』『前太平記古跡鑑』『弓勢智勇淡』等

近松半二(二三八五―二四四三)『奥安達原』『天竺徳兵衛合鏡』『太平記忠臣講釋』『妹背

山婦女庭訓』『伊賀越道中双六』『三日太平記』『本朝廿四孝』『近江源氏先陣館』『關取

千兩鑑』『道中龜山嶽』『新版歌祭文』等

等相ついで輩出しき。是かるに此の頃浄瑠璃の外また別に狂言作者と唱へて専ら歌舞妓、狂言の脚本を作るもの出でたり。從來歌舞伎狂言に用ひる脚本は大抵其の役者等の作に係るものなりしが此に初めて役者以外に作者を出だすに至りしなり。明和安永の交より文化文政に至りて狂言作者の名あるもの其の數多かりしが最も世に聞こえたるは

櫻田治助(二四〇八一—二四八〇)『名譽仁政録』『櫻田葉清水清玄』『黄八丈三筋壱島』『於玉ヶ池三人瓶』『恭盤忠信雲黒石』『明烏花露水等』

並木五瓶(二四二一—二四八二)『傀儡淺妻船』『平井權八吉原節』『源平柱礎屋』『五大力等』  
鶴屋南北(四代目、二四一五—二四八九)『敵討乗合斬』『戀女房仇討双六』『四十七手本の裏』『寝寝櫻沖津白浪』『於染久松色置賣』『四谷怪談等』

瀬川路考(生死未詳)『忍び胸仇な沙波』『色三味線仇合弾』『三枚屏風等』

等なるべし。淨瑠璃の作者は歌舞好狂言榮えて操人形の衰微すると共に其の世に出でしもの次第に少く亦名あるものありしを聞かず。狂言作者には其の後河竹新七、瀬川如皋等二三の輩ありきといへども是れは大いに其の名を爲せりしものにあらざりき。

小説の發達は殆ど此の時代の文學の大半を領有するまでに至れり。さて早くは寛文の頃諸の文學緒につく時に當り小説にも假名、卯子といふものありき。假名卯子は漢書佛經又は古文等に見えたる珍説異聞を翻案して娛樂に供すると共に一般の智識を啓發するを目的としたるものなり。故に其の作大抵教訓七分にし

て好色ものめくもの三分、重に一廉の學者を以て世に許されたるものゝ一時の手ずさびになれるが多し。

如歸子(生死未詳)『可笑記』『百八町記』

鈴木正三(二二三九—二三一五)『二人比丘尼』『因果物語』『念佛草紙』『魔の卯分』『蘆花橋』『盲安枝』等

山岡元隣(二二九一—二二三二)『誰が身の上』『小庵』其の他國文俳諧の著書多し

淺井了意(二三五一—?)『晴明物語』『浮世物語』『三井寺物語』『天張子』『御伽卯子』『其の

#### 他國文の著書等

の如きは即ち當時の作者の主なる者なりき。かくて天和年間に至り世情を寫すを以て旨とせる浮世草子といふもの世に行はれぬ。蓋し假名草子の中にも早く二三は世情に着眼して筆を染めたるも見ゆれど一般に浮世草子として職認せらるゝは井原西鶴大坂に出で、世情を寫せるを始とやすべき。浮世草子は教訓若しくは怪談を主とせるものもありといへども大方は狹斜の事情、漂客の痴態を描ける好色もの多し。其の作者に

井原西鶴(二三〇二―二三五二)『好色一代男』『全二代男』『全三代男』『全一代女』『小夜

嵐』『交反古』『男色大鑑』『匠土産』『日本永代藏』『世間胸算用』『機置』等

八文字舎自笑(二三二六―二四〇五)『風流軍配團扇』『浮世親父氣質』『傾城玉子酒』『世

間世帯鏡』『女非人綴錦』等

江島屋其碩(二三二七―二三九六)『咲分五人戀』『世間手代氣質』『風流色三味線』『傾城

禁短氣』『世間子息短氣』『世間親父短氣』『傾城情の手枕』等

青木鷲水(二三一八―二三九三)『御伽百物語』『近代因果物語』『丹前露男』『風流吉日

鏡會我』等

月尋堂(生死未詳)『今様廿四孝』『兄弟善惡車』『子孫大黒柱』『世間用心記』『武道真砂實

記』

等殊に名聲高かりき。されども浮世草紙は自笑其碩等の歿後殆ど衰殘に歸して  
京坂の小説壇上もこゝに略其の終りを告げぬ。江戸には貞享元祿の頃より赤本  
と唱ふる草双紙の幼稚なるものありしが其の後平賀鳩溪によりて京坂の文學を  
移植せらるゝに及び著るき進歩を爲せり。即ち天明の頃に

戀川春町(二四〇四―二四四九)『金々先生榮花の夢』『親の敵討てや腹鼓』『風俗通』『間

違曲輪遊』等

明誠堂喜三次(二三九五―二四七三)『鐘入七人化粧』『大通問違會我』『太平記万八講

釋』『長生見度記』『吹返柳黒髪』『新風俗志』『珍獻立會我』『見徳一炊夢』等

等の徒出で、頻りに詞壇に馳騁したりき。されども此の頃は未だ江戸作者の地  
位を高むるに至らず寛政の初の方

山東京傳(二四二一―二四七六)『稻妻表紙』『本朝醉菩提』『優曇華物語』『通言總編』『黄

金花男道成寺』『系櫻本朝文粹』『娘清玄振袖日記』『松と梅竹雨物語』『忠臣水滸傳』等

芝全交(二四五三)『通言武者揃』『茶歌舞妓茶の目傘』『親の敵現歎夢也』『浮世操九

面十面』等

唐來三和(生死未詳)『人は唯一心の命』『會我物語噓實錄』『家内手本用心藏』『大道具舖

幕無』等

櫻井慈悲成(生死未詳)『八面槌鼻の親玉』『定紋花の輪違』『運次第出雲の縁組』『御存知

高麗屋傳』等



烏亭焉馬(二四〇三—二四八二)『忠孝湖武志』『復讐松山話』『假名手本忠臣蔵』『兩國見

世物語』『赤本昔物語』等

初代振鷺亭(生死未詳)『卯月八日物語』『大時代唐土化物』『世事第一口の輕業』『復讐猫

股屋舖』等

等出づるに及びて江戸の小説壇は春の到りしが如き趣あり。就中京傳は稗史の緒を開きて世に流行せり。此の頃の作者は大抵また狹斜の事情を描きて淫猥極まれる洒落本といふをもものせざるはなかりき。蓋し洒落本は浮世草子の變遷し來れるもの、彼れに比すれば一層猥褻なるところありしを以て寛政三年に嚴禁せられぬ。文化文政の頃京傳の門下に

曲亭馬琴(二四二七—二五〇八)『俊寛僧都島物語』『武王平談』『漢楚平談』『皿々那談』

『糸櫻春蝶奇縁』『近世既美少年縁』『俠客傳』『里見八犬傳』『新編金瓶梅』『南柯夢』『月

氷奇縁』『胡蝶物語』『椿脱弓張月』『三國一夜物語』『朝夷巡島記』等

興りて稗史新一生面を開き専ら勸善懲惡の主義を交へき。是れと同時に若しくは稍く先に

式亭三馬(二四三六—二四八二)『人心眼機關』『箱根竊賊燈籠仇討』『普請舟前風呂』『浮世

風呂』『浮世床』『辰巳婦言』等

十返舎一九(二四九一—二五〇二)『藤栗毛』『金のわらじ』『常夏物語』『鬨男狸の金箔』『多羅羅注

文帳』『原憲氣地』等

の徒は滑稽諧謔を以て稱せられ

柳亭種彦(二五〇二—二五〇三)『近世怪談宵夜星』『淺間獄面影草紙』『藤紫田舎源氏』『那那諸國

物語』『寺入御用』等

は淨瑠璃及び八文字合ものを加味して別に草双紙の合巻に趣向を凝らし

爲永春水(二五〇二—二五〇三)『いろは文庫』『貞操婦女八賢譜』『梅見船』『花鳥風月』『梅歴』『笠

松峠戀小車』『園の雪花の魁』等

は又洒落本より脱化して好色本に倣ひ人情本の一派を立て、世に迎へられぬ。かゝれば文化文政年間に於ける小説の發達は如何に燦然たるものありしか推して知るべきなり。今こゝには只々其の大體のやうを掲ぐるのみ。

附言 予輩が最初此の文學史を講述するに當りては成るべく精密にして遺漏なく而も

及ぶべくは維新以後に於ける明治文學の變遷をも尋ねて將來我が邦に起るべき文學の資に供せんを欲したり。まことに予輩の微力なる坐右書冊の乏しきと他に二三のさほる事ありて徳川時代の文學だに充分に講了する能はず大略のみを掲げて筆を闕くに至りしは甚だ遺憾とするところなり。諸子希くは之れを諒して各種の文學につき更にみづから進みて攷究の志を立てんとす。

明治三十年十一月下浣

講述者志るす

## 日本文學史 完

### 日本文學史附録

#### 日本文學年表

帝名とあるは歴代の天皇の諡號を記載したてまつるもの、其の下に降誕崩御と列記せるは歴代の天皇の降誕崩御せられたる年を我が紀元にて録し奉るものなり。

年號は歴代の改元せられたる年號を示し年數は其の年號の稱せられたる年數を示すものなり。

紀元とあるは皇國の紀元のことにて歴代の天皇年號、其の年數、又は重要な事件人物等の時代の現今より何年前なるかを知るに宜しきは勿論、此等相互の相距る年間を知るに適せしむ。

歴代の天皇の在位の年間を瞭然たらしむるために縦線を施し且其の兩線の間の右方に即位、左方に讓位の紀元を記したり。されば其の紀元の年數の差を算出して在位の年間を知るべく又之れを降誕崩御の年に對照打算して天皇の幾歳にて踐祚せられ或は讓位せられしかを知るを得。但し前代の紀元

と後代の紀元と直ちに相連続せざるは天皇の空位ありしを示し前後相同じきは讓受の同年なりしを示すなり。

西洋紀元を録するは彼我の時代を對照する時の便宜とす。

政治上社會上の重要な事件と人物とを記するは當代の文學の如何なるものなりしか又其の文學の如何に時代と關係せしかを大略推測すべき便宜に供するものなり。

文學者の生存時代を各歴代に配するには單に其の生存年間の中ごろを以てす。其の各人の下に録する生死の紀元により何年頃より何年頃まで又は何天皇何事件の頃に生存せし人なりなしと知り得べし。

著作の書名は索より其の中につきて重要なもののみを記す。

神武以前	帝名 崩御 年號 年數 紀元	紀元 西洋	政治上社會上の 重要な事件	重要な文學者又は著作	政治上社會上の 重要な人物
			須佐之男命新羅に渡り程なく歸りて出雲に居給ふ此の頃既に鐵器あり	須佐之男命(歌)「紀」(日本書紀)の略 下照姫(歌)「紀」 大國主命(歌)「紀」 沼河姫(歌)「紀」	大國主命

神武 紀前五 紀後七六	綏靖 二九 一一二	安寧 九四 一五〇	懿德 一〇八 一八四	孝昭 一五五 二六八	孝安 二二九 三七〇
七六 八〇	一一二 一一三	一一三 一一四	一五〇 一五一	一八四 一八六	二二九 二六九
前紀 六六一 六六〇	五八五 五八二	五四九 五四八	五一〇 五一〇	四七五 四七六	二九一 二九一
神武天皇始めて海内を一統し大和橿原宮に即位す 皇祖天神を鳥見山に祭る 國名を秋津洲と稱す	大和葛城高丘宮に遷る	大和片鸕野穴宮に遷る	大和輕曲狹宮に遷る	大和掖上池心宮に遷る	大和室秋津島宮に遷る
須勢理姫命(歌)「紀」 彦火々出見尊(歌)「紀」 豐玉姬(歌)「紀」					
可美真手命					

孝靈	孝元	開化	崇神	垂仁	景行	成務	仲哀
三一九 四四六	三八八 五〇三	四四九 五六三	五二三 六三一	五九一 七三〇	六四九 七九〇	七四四 八五〇	八〇九 八六〇
三七一	四四七	五〇四	六三二	七三〇	七九〇	七九一	八六〇
二九〇	二二五	一五七	三〇	二九	一三〇	一三一	二〇〇
大和黒川鹿戸宮に遷る	大和橿原宮に遷る	大和春日率川宮に遷る	大和磯城瑞籬宮に遷る 四道將軍を創設す	任那始めて入貢す 大和額向珠城宮に遷る 新羅王子天日槍歸化す 殉死を禁す	大和額向日代宮に遷る 筑紫熊襲反す 天鳥親征す 日本武尊東夷を征す	近江志賀高穴磯宮に居る 武内宿禰を大和臣と爲す 山河を界して國郡を置く 越前角鹿宮に遷る	神功皇后新羅を征服す 大和磐余宮に遷る 磐坂忍熊兵を率ぐ 百濟新羅入貢す 魏に使臣を遣はす
			崇神天皇 (歌) 『紀』		橘媛命 (歌) 『紀』 日本武尊 七四二—七七一 (歌) 『紀』 宮簀媛 (歌) 『紀』 景行天皇 (歌) 『紀』		
				野見宿禰			

神功皇后	應神	仁徳	履仲	反正	允恭
八三〇 九二九	八六〇 九七〇	九五〇 一〇五九	九九九 一〇六五	九一一 九七〇	一〇三六 一一一三
八六一	九三〇	九七三	一〇六〇	一〇七〇	一一一三
二〇一	二七〇	三三三	四〇〇	四一〇	四五三
神功皇后新羅を征服す 大和磐余宮に遷る 磐坂忍熊兵を率ぐ 百濟新羅入貢す 魏に使臣を遣はす	大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る	大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る	大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る	大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る	大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る
忍熊王八六一 (歌) 『紀』 熊之凝 (歌) 『紀』 神功皇后 (歌) 『紀』	荒道稚郎子 (歌) 『紀』 大山守皇子 (歌) 『紀』 應仁天皇 (歌) 『紀』	磐姫皇后一〇〇七崩 (歌) 『紀』 國依媛 (歌) 『紀』 武内宿禰一〇五〇 (歌) 『紀』 仁徳天皇 (歌) 『紀』 卑別皇子一〇四〇 (歌) 『紀』	履仲天皇 (歌) 『紀』		衣通姫 (歌) 『紀』 允恭天皇 (歌) 『紀』 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る 大和額向日代宮に遷る
武内宿禰					

宣化 一一二七 一一九九	欽明 一一三一	敏達 一一四五	用明 一一四七	崇峻 一一八〇 一一五二	推古 (女帝) 一一二四 一一八八	舒明 一一〇一
一一九六	一一三三	一一四五	一一四七	一一五三	一一八八	一一〇一
五三六	五七二	五八五	五八七	五九二	六二八	六四一
大和橿原に遷る	大和敷島金刺宮に遷る 船辰爾(漢)	大和石上廣高宮に即位す	大和石上廣高宮に即位す	大和倉梯宮に遷る 蘇我馬子天皇を弑せしむ	大和小船山宮に遷る 法興寺成る 冠位十二階を制定す 蘇我馬子天皇に即位す 蘇我蝦夷(一三〇三)蘇我入鹿(一三〇三)蘇我入鹿(一三〇三)蘇我入鹿(一三〇三)	大和橿原宮に遷る 蘇我蝦夷(一三〇三)蘇我入鹿(一三〇三)蘇我入鹿(一三〇三)蘇我入鹿(一三〇三)
	蘇我稻目	中臣尾鎌子	中臣勝屋海		蘇我馬子 蘇我蝦夷	蘇我入鹿

安閑 一一二六 一一九五	繼體 一一一〇 一一九一	武烈 一一六六	仁賢 一一〇八 一一五八	顯宗 一一四七	滑寧 一一四七	雄略 一〇七八 一一三九	安康 一〇六一 一一一六
一一九四	一一九一	一一六六	一一五八	一一四七	一一四四	一一三九	一一一六
五三三	五三一	五〇七	四九八	四八七	四八四	四七九	四五六
大和石上廣高宮に即位す	大和泊瀬川城宮に即位す 百濟入貢	大和石上廣高宮に即位す	大和石上廣高宮に即位す	大和飛鳥八釣宮に即位す 始めて曲水の宴を設く	大和橿原宮に即位す	新羅任那反す 始めて桑を植ふしむ	大和石上廣高宮に遷る 眉輪天皇を弑す
安閑天皇(歌)『紀』	段楊爾(漢)	武烈天皇(歌)『紀』	仁賢天皇(歌)『紀』	顯宗天皇(歌)『紀』 影媛(歌)『紀』 大伴鮪(一五八)蘇我入鹿(一三〇三)蘇我入鹿(一三〇三)		雄略天皇(歌)『紀』 蘇我入鹿(一三〇三)	安康天皇(歌)『紀』
	巨勢男 物部麤鹿火					平群真鳥	

皇極 (女帝) 一三二二	孝德 一三一四	天智 一三二八 一三三一	齊明 (皇極承祚) 一三二二	弘文	天武 一三四五
大化 五	白雉 五				朱鳥 一
一三〇二	一三〇五	一三二八	一三二二	一三三二	一三四五
六四二	六四五	六六八	六六一	六七二	六八五
飛鳥板蓋宮に遷る	中大兄等入鹿を誅す 始めて年號を建つ 藤原長柄に遷都す 冠制を改く 八省百官を始設す	近江志賀宮に居る 三韓入貢 諸禮唐式に倣ふ	新羅を伐ちて克たす 唐使來りて好を通す	大海人皇子反	飛鳥淨見原宮に遷る 始めて不破關を設く 對馬銀錢を貢す 親王以下庶人の服色 を定め臣民の氏族を 分けて八等とす 諸國の境域を定む 全國の正丁の四分一 を兵と爲す
	孝德天皇 (歌) 『紀』 有馬皇子 (一三八一) 歌 『萬葉』	和國女王 (歌) 『萬葉』 藤原鎌足 (一七四一) 三二九 (歌) 天智天皇 (歌) 『萬葉』	齊明天皇 (歌) 『萬葉』 『紀』	弘文天皇 (詩) 『懷風藻』 麻績王 (歌) 『萬葉』	十市皇女 (一三三九) 歌 『萬葉』 鏡女王 (一三四四) 歌 『萬葉』 天武天皇 (一三四五) 歌 『萬葉』 藤原夫人 (大原) 歌 『萬葉』 紀皇女 (歌) 『萬葉』 大津皇子 (一三三二) 一三四六 (歌) 『萬葉』 川島皇子 (一三七七) 一三五二 (歌) 『萬葉』 高市皇子 (一三五五) 一三五六 (歌) 『萬葉』 弓削皇子 (一三五九) 歌 『萬葉』 大伴御行 (一三六一) 卒 (歌) 『萬葉』
	高向玄理	中大兄皇子 (天智天皇) 藤原鎌足			

持統 (女帝) 一三六二	文武 一三四三 一三六七	文武 一三四三 一三六七	文武 一三四三 一三六七	文武 一三四三 一三六七	文武 一三四三 一三六七
朱鳥 三	大寶 三	慶雲 四	大寶 三	慶雲 四	慶雲 四
一三四七	一三四九	一三五〇	一三六〇	一三六一	一三六三
六八七	六八九	六九〇	七〇〇	七〇一	七〇三
大和藤原の宮に遷る 始めて元嘉曆儀風曆 を行ふ 女官及び鑄錢司をお く 武を諸國に設す	役の小角を伊豆に流 す 律令を撰す 釋奠を大學寮に行 ふ 新律度量を頒つ 太上天皇を火葬す 夏早 諸國の調の半を免す	銀錢を廢して銅錢を 鑄る 都を大和國奈良に定 む以後七代の間につ づく 修史	藤原不比等 (一三二九) 一三八〇 (詩) 『懷風藻』 (漢文) 『令』 『律』 『萬葉』 元明天皇 (歌) 『萬葉』 三方沙彌 (歌) 『萬葉』 (詩) 『懷風藻』 太安履 (一三八三) 死者 『古事記』 『日 本書紀』 (共撰) (歌) 『萬葉』 (詩) 山前王 (一三八三) (歌) 『萬葉』 (詩) 下毛野皇 (詩) 『懷風藻』 (漢文) 『經國集』 刀利宣令 (歌) 『萬葉』 (詩) 『懷風藻』 (漢	持統天皇 (歌) 『萬葉』 春日王 (一三六三) 歌 『萬葉』 高市連黒人 (歌) 『萬葉』 百濟公使唐 (詩) 『懷風藻』 (漢文) 『經國集』 御名部皇女 (歌) 『萬葉』 文武天皇 (歌) 『萬葉』 但馬皇女 (一三六八) 歌 『萬葉』 柿本人麿 (歌) 『萬葉』 大伴安履 (一三七四) 歌 『萬葉』 春日藏首老 (歌) 『萬葉』 (詩) 『懷風藻』 河邊宮人 (歌) 『萬葉』 長皇子 (一三七五) 歌 『萬葉』 穗積皇子 (一三七五) 歌 『萬葉』 志貴皇子 (一三三九) 一三七六 (歌) 『萬 葉』	藤原不比等

元明 一三二二 一三八一 (女帝)	和銅 七	一三七四 一三七五	七二四 七二五	諸國に詔して「風土記」を撰進せしむ	文「經國集」 安房守(歌)「萬葉」 麻田神陽春(歌)「萬葉」(詩)「傾風藻」 「風土記」 長屋王「三三五—三八九」(歌)「萬葉」(詩)「傾風藻」 大伴旅人「三九一」(歌)「萬葉」(詩)「傾風藻」 安倍廣庭「三九二」(歌)「萬葉」(詩)「傾風藻」 山上憶良「三九三」(歌)「萬葉」 葛井房成(歌)「萬葉」(詩)「傾風藻」 高橋山成(歌)「萬葉」 山邊赤人(歌)「萬葉」 「山邊赤人集」 舍人親王「三三六—三九五」(歌)「萬葉」(著)「日本書紀」(安房共撰)	舍人親王
元正 一三四〇 一四〇八	鑑鏡 二	一三七六 一三七七	七二六 七二七	遣唐使を派す 僧行基を逐ふ	藤原房前「三九七卒」(歌)「萬葉」(詩)「傾風藻」 小野老「三五三—三九七」(歌)「萬葉」 藤原房前「三三九—三九七」(歌)「萬葉」(詩)「傾風藻」 高安王「四〇二」(歌)「萬葉」 門部王「四〇五」(歌)「萬葉」 大伴赤持「四〇六」(歌)「萬葉」 元正天皇(歌)「萬葉」 安貴王(歌)「萬葉」	玄 昉

聖武 一三六一 一四一六	養老 七	一三八三 一三八四	七二三 七二四	蝦夷反 五月より八月まで雨ふらず今年の田租を免す	湯原王(歌)「萬葉」 背奈行文(歌)「萬葉」 大伴百代(歌)「萬葉」 大伴四綱(歌)「萬葉」 大伴坂上大環(歌)「萬葉」 大伴田村大環(歌)「萬葉」 笠女郎(歌)「萬葉」 釋行基「三二八—一四一〇」	玄 昉
神龜 五	天平 二〇	一三八八 一三八九	七二八 七二九	蝦夷反 施藥院を設く 遣唐使を發す 尼服して朝禮を受く	石上乙麻呂「四一〇」(歌)「萬葉」(詩)「傾風藻」 安倍麻呂「四二二」(歌)「萬葉」 大伴坂上那女(歌)「萬葉」 橘諸兄「三六一—四一七」(歌)「萬葉」 橘奈良原「四一七」(歌)「萬葉」 光明皇后「三六一—四二〇」(歌)「萬葉」 藤原仲麿「四二三」(歌)「萬葉」	光明皇后
天寶 八	天寶 一	一四〇八 一四〇九	七四八 七四九	聖武上皇受戒し自ら三寶の奴と稱す 東大寺に幸し殺生を禁す 吉備置備等唐より歸る	大伴駿河屋「四二三」(歌)「萬葉」 藤原仲麿(歌)「萬葉」 市原王(歌)「萬葉」 大伴池主(歌)「萬葉」 忌部黑麻呂(歌)「萬葉」	藤原仲麿 (押勝)
天寶 二	天寶 一	一四一八 一四一九	七五八 七五九	聖武上皇受戒し自ら三寶の奴と稱す 東大寺に幸し殺生を禁す 吉備置備等唐より歸る		

日本文學史附録 日本文學年表

桓武 一三九七 一四六六	光仁 一四四二	稱徳 (孝謙重祚)	淳仁 一四二五
延暦 二四	天應 一	神護 景雲 三	天 寶 字 平
二四	一	二	七
一四六五	一四四一	一四二九	一四一八
八〇五	七八二	七六九	七五八
都を山城に經營す 平安城を曰ふ 延暦寺を建つ 伊勢美濃飛騨の三關 を廢す 『根日本紀』成	道鏡を下野に放つ 安倍仲磨唐に卒す 渤海來貢 穀價を定む 蝦夷亂る	道鏡を太政大臣禰師 と爲し大い法王と 爲す 天皇釋奠に臨幸 和氣清原勳に觸る 道鏡の意に迷ふが故 なり	近江保良に遷る 押勝反 天皇廢せらる
『後拾遺』(著)『皇太后官儀式録』 大中原實綱(著)『皇太后官儀式録』 尾形廣成(著)『古語拾遺』	石上宅嗣(歌)『萬葉』(詩)『經國集』 大伴眞見(歌)『萬葉』 石川房成(歌)『萬葉』 光仁天皇(歌)『新古今』『新勅撰』等 淡海三船(一三八一—一四四五)(詩) 『經國集』(著)『鑑真和尚東征傳』 『慎風藻』 大伴家持(一四四五卒)(歌)『萬葉』 (著)『萬葉集』	藤原實綱(一三七五—一四二六)(歌) 『萬葉』 稱徳天皇(歌)『萬葉』漢文東大寺願文 安倍仲磨(一三六一—一四三〇)(歌) 『古今集』(詩)『文苑英華』 智努王(一四三〇卒)(歌)『萬葉』 大伴村上一(歌)『萬葉』 吉備武備(一三五三—一四三五)(文) 『私教類聚』 大伴古基(一三三七卒)(歌)『萬葉』 藤原實綱(一四三七卒)	淳仁天皇(歌)『萬葉』
坂上田村麻呂		藤原百川	僧道鏡 和氣清麻呂

平城 一四二〇 一四七〇	嵯峨 一五〇一	淳和 一五〇〇
大同 四	弘仁 一四	天長 一〇
四	一四	一〇
一四六六	一四八三	一四九三
八〇六	八二二	八三三
『大同類聚』成	加茂醫院を創置す 『姓氏錄』成 諸國に茶を植う 空海高野山を開く 『弘仁格式』成 漢學を奨勵す	旋薬院創置 始めて水車を作る 『新撰格式』成 『秘府略』成 『令義解』成
平城天皇(歌)『古今』『續後拾遺』 (詩)『後撰集』『經國集』 菅野真道(一四〇一—一四七四)(詩) 『後撰集』(著)『根日本紀』 仲雄王(詩)『後撰集』『經國集』 『文雅秀麗集』	賀陽豐年(一四一一—一四七五)(詩) 『後撰集』『經國集』 釋最澄(傳教大師)一四三八—一四 八二(歌)『新古今』『根古今』 拾遺(著)『顯戒論』『守國界草』 仁王般若經註釋『傳教大師消息』 釋景戒(著)『日本靈異記』	藤原冬嗣(一四八六卒)(歌)『後撰』 (詩)『後撰集』『經國集』 (著)『日本後紀』『内裏式』(二書 共撰) 眞崇安世(一四四六—一四九〇)(詩) 『後撰集』『經國集』 『文雅秀麗』(著) 『經國集』『日本後紀』 『内裏式』 (以上共撰) 小野守一(一四三八—一四九〇)(詩) 『後撰集』『經國集』 『文雅秀麗』(著) 『後撰集』『内裏式』(共撰) 萬多親王(一四四八—一四九〇)(著) 『新撰姓氏錄』
藤原仲成	空海 藤原冬嗣	清原夏野 藤原三守



淳和 一五〇〇	嵯峨 一五〇一	平城 一四二〇 一四七〇	天長 一〇	弘仁 一四	大同 四	一四六六 一四七〇 一四八九 一四八三 一四八四	八〇六 八〇九 八一〇	「大同類聚」成 加茂齊院を創置す 「姓氏錄」成 陸奥に茶を植う 空海高野山を開く 「弘仁格式」成 漢學を奨励す	「大同類聚」成 平城天皇(歌)「古今」 「續後拾遺」 「後拾遺」(著)「般若心經疏釋」 「大中臣直綱」(著)「皇太神官儀式類」 「忌部廣成」(著)「古語拾遺」 藤原冬嗣(歌)「古今」 「續後拾遺」 「後拾遺」(著)「般若心經疏釋」 「大中臣直綱」(著)「皇太神官儀式類」 「忌部廣成」(著)「古語拾遺」 仲雄王(詩)「後拾遺」 「經國集」 「文雅秀麗」 藤原冬嗣(著)「文雅秀麗集」	藤原仲成
天長 一〇	八二二 八二四	八二二 八二四	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	藤原夏野 藤原三守

桓武 一三九七 一四六六	光仁 一四四二	稱徳 (孝謙重祚)	天應 一	寶龜 二	神護 二	景雲 三	天長 七	淳仁 七	天應 七	寶字 七	一四一八 一四二四 一四二五	七五八 七六四 七六五	近江保良に遷る 「天應」成	淳仁天皇(歌)「萬葉」	僧道鏡 和氣清麻呂	
延暦 二四	天應 一	寶龜 二	一	二	二	三	七	七	七	七	一四二九 一四三〇 一四四一 一四四二	七六九 七七〇 七八〇 七八一	道鏡を下野に放つ 安倍仲磨唐に卒す 渤海來貢 穀價を定む 蝦夷亂る	石上宅嗣(歌)「萬葉」 大伴見(歌)「萬葉」 石川廣成(歌)「萬葉」 光仁天皇(歌)「新古今」 「新勅撰」等 「經國集」(著)「鑑真和尚東征傳」 「續風藻」 大伴家持(四四五卒)(歌)「萬葉」 (著)「萬葉集」	藤原百川	
一四六五	七八二	七八一	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	「新撰格式」成 「秘府略」成 「令義解」成	藤原冬嗣 空海 藤原冬嗣

光孝 一四九一 一五四七	仁和 一	陽成 一五二八 一六〇九	元慶 八	清和 一五〇〇 一五四〇	貞觀 一八
三	一五四八	一五四四	一五三七	一五三六	一五二九
八八七	八八八	八八四	八七七	八七六	八五九
平姓を高望王に賜ふ 『類聚國史』成る 基經の女を女御となす 新羅邊界に冠す		奥羽賊亂を作す 『文徳實錄』成 大學院を創置す 渤海使來る 基經帝を廢す	長慶宣明曆を頒行す 富士山噴火 『貞觀格式』『續日本 後紀』成 藤原良房を三后に准 渤海使來朝		
僧正遍照 一四七五—一五五〇 『歌』『古今』『後撰』『拾遺』『新古今』 『源氏物語』 橘廣朝 一四九七—一五五〇 (文)『本 朝文粹』 大輔 (歌)『古今』『後撰』『玉葉』 喜撰法師 (歌)『古今』『玉葉』 文房藤原 (歌)『古今』『後撰』	光孝天皇 (歌)『古今』『新古今』『新 勅撰』等其の他の歌集	都良香 一五〇四—一五三九 (歌) 『古今』 (詩)『扶桑』 (著)『都氏文 集』『文徳實錄』 在原業平 一四八五—一五四〇 『歌』『古今』『後撰』等其の他の歌集 『伊勢物語』『在原業平朝臣集』	醍醐仁 (慈覺大師) 一四五四—一五二 四 (歌)『新古今』『續古今』『新拾 遺』等 春澄善成 一四五七—一五三〇 (著) 『日本後紀』 (共撰) 藤原良房 一四六四—一五三二 (歌) 『古今』 (著)『續日本後紀』 惟喬親王 一五〇八—一五三三 (歌) 『古今』『後撰』『新古今』等 紀有常 一四七五—一五三七 (歌)『古 今』『新古今』 都良赤 (詩)『經國』『後撰』『文華秀 麗』 藤原良房 一五〇四—一五三九 (歌) 『古今』 (詩)『扶桑』 (著)『都氏文 集』『文徳實錄』 在原業平 一四八五—一五四〇 『歌』『古今』『後撰』等其の他の歌集 『伊勢物語』『在原業平朝臣集』		
		藤原基經			

文徳 一四八七 一五一八	齊衡 三	仁壽 三	嘉祥 三	仁明 一五二〇	承和 一四	
二	三	三	三	一五〇七	一四九四	
一五二八	一五一七	一五一四	一五〇八	八四七	八三四	
八五八	八五六	八五三	八四八			
三關を復置す	奥州賊起る				藤原常嗣小野宮を唐 に派す 『日本後紀』成	
滋野貞主 一四四五—一五二二 (詩) 『後撰』『文華秀麗』『經國』 (著) 『經國集』 (共撰)『秘府略』 小野宮 一四六二—一五二二 (文)『本 朝文粹』 (詩)『經國』『扶桑集』 藤原良房 一四六四—一五三二 (歌) 『古今』『新古今』『玉葉』等 藤原朝雄 一四六四—一五二三 (歌) 『古今』 (詩)『經國』	藤原良房 葛野親王			藤原三守 一四四五—一五〇〇 (著) 『弘仁格式』 (共撰) 藤原常嗣 一四五六—一五〇〇 (詩) 『經國集』 (著)『今鏡解』 (共撰) 巨勢藏人 (詩)『後撰』『經國』『文華 秀麗』 淳和天皇 (詩)『後撰』『經國』『文華秀麗』 嵯峨天皇 (歌)『新後撰』『後撰拾遺』 菅原清公 一四三〇—一五〇二 (詩) 『後撰』『經國』『文華秀麗』 (文) 『經國集』 仁明天皇 (歌)『新拾遺』	釋空海 (弘法大師) 一四三三—一四 九五 (歌)『新勅撰』『續千載』『風 雅』 (詩)『經國集』 (著)『遍照發願 性靈集』『文鏡秘府論』『秘要茶經』 十住心論』『三教指歸』等 清原夏野 一四九七 (著)『今鏡解』 (共撰) 藤原三守 一四四五—一五〇〇 (著) 『弘仁格式』 (共撰) 藤原常嗣 一四五六—一五〇〇 (詩) 『經國集』 (著)『今鏡解』 (共撰) 巨勢藏人 (詩)『後撰』『經國』『文華 秀麗』 淳和天皇 (詩)『後撰』『經國』『文華秀麗』 嵯峨天皇 (歌)『新後撰』『後撰拾遺』 菅原清公 一四三〇—一五〇二 (詩) 『後撰』『經國』『文華秀麗』 (文) 『經國集』 仁明天皇 (歌)『新拾遺』	源常 橘氏公

宇多  
一五二七  
一五九一

寛平  
九

一五四八  
一五四九  
八八八  
八八九

藤原太夫 (歌) 『猿丸大夫集』  
藤原俊隆 (歌) 『古今』 『後撰』  
島田忠臣 (漢文) 『本朝文粹』  
小野小町 (歌) 『古今』 『新古今』  
『新勅撰』 『後撰』 『新古今』  
在原行平 (四七九) 『古今』  
源融 (一四八二) 『古今』  
藤原仲平 (一四八六) 『古今』  
源能 (一五〇五) 『古今』  
源能 (一五五七) 『古今』  
『新勅撰』

源融

菅原道真

昌泰  
三

一五六〇  
一五六一  
九〇〇  
九〇一

上皇剃髮して法皇と稱す  
菅原道真を貶す  
『三代實錄』成  
和歌勅撰す  
『古今集』成

在原棟梁 (一五五八卒) (歌) 『古今』 『後撰』  
藤原敦行 (一五六一卒) (歌) 『古今』 『後撰』  
大藏善行 (著) 『三代實錄』  
小野美材 (一五六二卒) (歌) 『古今』 『後撰』  
『漢文』 『本朝文粹』  
菅原道真 (一五〇二) 『古今』 『後撰』  
『古今』 『後撰』  
『菅家後集』 『類聚國史』 (詩)  
『本朝文粹』 『扶桑集』  
『源朝』 (智證大師) 『四八七』 『一五六五』  
『新古今』 『古今』 『後撰』  
紀有則 (一五〇五) 『古今』 『後撰』  
『後撰』 『拾遺』 『紀有則集』 『古今和歌集』 (共撰)  
凡河内躬恒 (一五九一) 『一五六七』 (歌) 『古今』 『後撰』 『拾遺』 (著)  
『凡河内躬恒集』 『古今和歌集』 (共撰)  
藤原實根 (一五一五) 『一五六八』 (歌)

醍醐  
一五四五  
一五九〇

延喜  
三三

一五八二  
一五八三  
九二二  
九二三

物部使來朝  
『延喜格式』成  
夏大旱  
聖賢齋像を清涼殿に詣く

『古今』 (著) 『朝野群載』 『延喜格式』 (共撰)  
藤原時平 (一五三一) 『一五六九』 (歌) 『古今』 (著) 『三代實錄』 『延喜格式』 (共撰)  
紀長谷雄 (一五〇五) 『一五七二』 (詩) (共撰)  
『本朝文粹』 『扶桑集』 『朝野群載』 (著) 『白雲集』  
三善清行 (一五〇五) 『一五七六』 (詩) 『扶桑集』 (著) 『智證大師傳』 『古今』 『後撰』  
紀淑留 (一五七九卒) (歌) 『古今』 『後撰』  
等 (漢文) 『本朝文粹』  
平貞文 (一五八三卒) (歌) 『古今』 『後撰』  
等 (歌) 『後撰』 『新古今』  
大江千里 (著) 『古今』 『後撰』 『新古今』  
『古今』 『後撰』 『新古今』  
大友黑主 (著) 『大江千里句題和歌』  
清原深養父 (歌) 『古今』 『後撰』 『新古今』  
等 (歌) 『古今』 『後撰』 『新古今』  
醍醐天皇 (歌) 『後撰』 『拾遺』 『新古今』  
等

藤原時平

藤原仲平

承平  
七

一五九〇  
一五九一  
九三〇  
九三一

藤原純友叛  
吳越人入貢

宇多天皇 (歌) 『古今』 『後撰』 『新古今』 (著) 『寛平遺戒』 『童子教』 等  
藤原安房 (著) 『新撰字鏡』  
藤原定方 (一五四三) 『一五九二』 (歌) 『古今』 『後撰』 『新勅撰』 等  
藤原兼輔 (一五三七) 『一五九三』 (歌) 『古今』 『後撰』 『新古今』 等 (著) 『堤中納言物語』  
紀有常 (一五九八卒) (歌) 『古今』 『新古今』  
伊勢 (一五九九卒) (歌) 『古今』 『後撰』 『拾遺』 等  
源宗子 (一五九九卒) (歌) 『古今』 『後撰』 『新勅撰』 等

	冷泉 一六一〇 一六七二	村上 一五八六 一六二七		
天祿 三	安和 二	康保 四	應和 三	
一六三〇	一六二九 一六二八	一六二七 一六二六	一六二〇 一六二二	一六二〇 九六一
九七〇	九六九 九六八	九六七 九六八	九六三 九六四	九六〇 九六一
		京師大水		
源信明 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	藤原實賴 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	小野好古 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	藤原仲文 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	藤原伊尹 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等
藤原伊尹	藤原實賴			

		朱雀 一五八三 一六二二		
天德 四	天曆 一〇	天慶 九		
一六一七	一六一六 一六一七	一六〇七 一六〇六	一五九七 一五九八	一五九七 九三七
九五七	九五六 九五七	九四六 九四七	九三八	九三七 九三八
吳越使來る	天下太平 夏春秋大風雨 『後撰和歌集』成	出羽の賊起る 平將門謀反 忠平の孫女女御とな		
大江朝綱 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	藤原忠平 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	藤原忠平 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	藤原忠平 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	藤原忠平 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等
	藤原忠平			

	冷泉 一六一〇 一六七二	村上 一五八六 一六二七		
天祿 三	安和 二	康保 四	應和 三	
一六三〇	一六二九 一六二八	一六二七 一六二四	一六二〇 一六二二	一五九七 一五九八
九七〇	九六九 九六八	九六七 九六四	九六〇 九六一	九三七 九三八
		京師大水		
源信明 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	藤原實賴 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 藤原仲文 撰『新古今』 『新勅撰』等 藤原仲文 撰『新古今』 『新勅撰』等 藤原仲文 撰『新古今』 『新勅撰』等	小野好古 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 藤原仲文 撰『新古今』 『新勅撰』等 藤原仲文 撰『新古今』 『新勅撰』等 藤原仲文 撰『新古今』 『新勅撰』等	平定文 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 大中原賴基 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 藤原清正 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 藤原清正 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 藤原清正 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	
藤原伊尹	藤原實賴			

		朱雀 一五八三 一六二二		
天德 四	天曆 一〇	天慶 九		
一六一七	一六一六 一六一七	一六〇七 九四七	一六〇六 九四六	一五九七 一五九八
九五六 九五七	九五六 九五七	九四七	九四六	九三七 九三八
吳越使來る	天下大平 夏春秋大風雨 『後撰和歌集』成	出羽の賊起る 平將門謀反 忠平の孫女女御とな		
大江朝綱 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	藤原忠平 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 藤原忠平 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 藤原忠平 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	源英明 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 坂上忠房 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 和物語 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 竹取物語 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 元真親王 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 藤原教忠 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等 紀實之 撰『拾遺』 『新古今』 『新勅撰』等	藤原忠平	



三條 一六三六 一六七七	長和 五	長元 九	萬壽 四	治安 三	寛仁 四	寛弘 八
一六七二〇二二	一六七六二〇二六	一六八〇二〇二〇	一六八二二〇二二	一六八三二〇二三	一六八四二〇二四	一六八七二〇二七
一六七二〇二二	一六七六二〇二六	一六八〇二〇二〇	一六八二二〇二二	一六八三二〇二三	一六八四二〇二四	一六八七二〇二七
天皇道長の弟に幸す 禁中腰出火	南蠻入寇	地震	平忠常反す源頼信之 な平々 大早瀬川濁る 富士山焚く	延暦寺の僧傲訴す	皇宮塵々火	皇宮塵々火
源正之(一六六〇卒)『拾遺』『後拾遺』『新古今』等(著)『源重具平親王(一六二四)一六六九(歌)』『拾遺』『後拾遺』『新古今』等(著)『大江以實(一六一五)一六七〇(歌)』『詞花』(詩)『拾遺』『後拾遺』『詞花』(新古今)等	大江国衡(一五三三)一六七二(歌)『後拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』『後拾遺』『詞花』(新古今)等	三條天皇(歌)『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原道長(一六一六)一六八七(歌)『後拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原齊信(一六一七)一六九五(歌)『後拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原保昌(一六一八)一六九六(歌)『後拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原通房(一六一八)一七〇一(歌)『後拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』『後拾遺』『詞花』(新古今)等
藤原行成 (能書)			源頼信	藤原通房		

後朱 一六七九 一七〇五	長久 四	寛徳 二	永承 七	天喜 五	康平 七	治暦 四	延久 四	白河 一七三三 一七三三	承久 一	承保 三	承暦 四	永保 三	應徳 三
一七〇〇二〇四〇	一七〇三二〇四三	一七〇四二〇四四	一七〇五二〇四五	一七〇六二〇四六	一七〇七二〇四七	一七〇八二〇四八	一七〇九二〇四九	一七一〇二〇五〇	一七一〇二〇五〇	一七一〇二〇五〇	一七一〇二〇五〇	一七一〇二〇五〇	一七一〇二〇五〇
一七〇〇二〇四〇	一七〇三二〇四三	一七〇四二〇四四	一七〇五二〇四五	一七〇六二〇四六	一七〇七二〇四七	一七〇八二〇四八	一七〇九二〇四九	一七一〇二〇五〇	一七一〇二〇五〇	一七一〇二〇五〇	一七一〇二〇五〇	一七一〇二〇五〇	一七一〇二〇五〇
皇宮塵出火	清原守武私に宋に往 きしによりて佐渡に 流す	安倍頼時亂を作す	源頼義漸く頼時等を 滅して陸奥が平々	始めて記録所を置く 斗升の法を定む	『金葉集』成	延暦寺僧徒園城寺を 焚く							
『前大納言公任卿集』『北山抄』和歌 九品論議『新撰藤原和漢朗詠集』 『三十六歌仙』等	藤原定頼(一六五六)一七〇五(歌)『後 拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』 『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原實資(一六二七)一七〇六(歌)『拾 遺』(著)『小右記』一七二四(歌)『玉 葉』(著)『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』 『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原長家(一六二五)一七二四(歌)『後 拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』 『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原家経(一七一八)一七二四(歌)『後 拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』 『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原基房(一七二四)一七二四(歌)『後 拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』 『後拾遺』『詞花』(新古今)等	上東門院(一六五八)一七三四(歌)『後 拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』 『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原頼通(一六五二)一七三四(歌)『後 拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』 『後拾遺』『詞花』(新古今)等	源隆國(一六六四)一七三七(歌)『後 拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』 『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原實綱(一六七〇)一七四二(歌)『千 載』『後拾遺』等	藤原通宗(一七四四)一七四四(歌)『後 拾遺』『新古今』等(著)『新古今』(詩文)『拾遺』 『後拾遺』『詞花』(新古今)等	藤原範永(歌)『後拾遺』『金葉』『詞 花』(新古今)等	藤原範永(歌)『後拾遺』『金葉』『詞 花』(新古今)等	藤原範永(歌)『後拾遺』『金葉』『詞 花』(新古今)等
藤原頼通	源頼義	藤原教通	藤原師實										

日本文學史附録 日本文學年表

堀河 一七三九 一七六七							鳥羽 一七六三 一八一六																				
寛治	嘉保	永長	承德	康和	長治	嘉承	天仁	天永	永久	元永	保安	天治	大治	天承	長承	保延	永治										
七	二	一	二	五	二	二	二	三	五	二	四	二	五	一	三	六	一										
一七四七	一七五三	一七五六	一七五七	一七五九	一七六三	一七六五	一七六八	一七六九	一七七〇	一七七九	一七八〇	一七八四	一七八六	一七九一	一七九二	一七九五	一八〇一										
一〇八七	一〇九三	一〇九六	一〇九七	一〇九九	一一〇三	一一〇四	一一〇八	一一〇九	一一一〇	一一一九	一一二〇	一一二四	一一二六	一一三一	一一三二	一一三五	一一四一										
出羽の白河原武衛等 亂を作す源義家之 討平す 上皇落飾して法皇と 稱す							源義親を隠岐に流す							大上皇政を院中に聽 く 平忠盛海賊を捕ふ 僧徒跳梁													
藤原忠家一六九二—一七五〇(歌)續 古今「續拾遺」「金葉」「詞花」 源賴長(歌)「後拾遺」「續後撰」續拾 遺「後撰」等 源賴房一六九七—一七五四(歌)「後 拾遺」「金葉」「千載」「新古今」等 源經信一六七一—一七五七(歌)「後拾 遺」「金葉」「詞花」「千載」「新古今」 等(詩文)「本朝文粹」 藤原師通一七三二—一七五九(歌)「後 拾遺」「千載」「新古今」等(著)「二 條關白記」 藤原師賢一七〇二—一七六一(歌)「後 拾遺」「詞花」「千載」「新古今」等 (著)「京極關白記」 源義家一六九五—一七六五(歌)「千 載」 藤原敦基一七〇五—一七六六(著)「柱 生願林」「國後抄」							大江匡房一七〇一—一七七二(歌)「後 拾遺」「金葉」「詞花」「千載」「新古 今」等 藤原正家一六八六—一七七二(歌)「金 葉」「千載」「續後撰」 源俊賴(歌)「金葉」「詞花」「千載」 「新古今」等(著)「金葉集」「山水圖 冊」「無明抄散木集」 藤原永親一七七一卒(歌)「千載」「續古 今」等 藤原行家一六六九—一七七六(歌)「千 載」「新勅撰」 藤原顯季一七一五—一七八三(歌)「後 拾遺」「金葉」「詞花」「千載」等(著) 「修理大夫顯季卿集」							藤原基俊一七一五生(歌)「金葉」 「詞花」「千載」「新古今」等 藤原基俊集(著)「悅目抄」「新三十六歌仙」 「新撰朗詠集」							藤原忠通 藤原賴長						

崇徳 一七七九 一八二四							近衛 一七九九 一八一五													
天治	大治	天承	長承	保延	永治	康治	天養	久安	仁平	久壽	天治	大治	天承	長承	保延	永治				
二	五	一	三	六	一	二	一	六	三	二	二	五	一	三	六	一				
一七八四	一七八五	一七八六	一七九〇	一七九一	一七九二	一七九四	一八〇三	一八〇四	一八〇五	一八〇六	一八〇二	一八〇三	一八〇四	一八〇五	一八〇六	一八〇七				
一一二四	一一二五	一一二六	一一三〇	一一三一	一一三二	一一三四	一一四三	一一四四	一一四五	一一五〇	一一四二	一一四三	一一四四	一一四五	一一五〇	一一五五				
大上皇政を院中に聽 く 平忠盛海賊を捕ふ 僧徒跳梁							南都僧叡山と焚く 山徒大津を焚く 「詞花集」成る							源賴政怪禽を射る						
藤原忠通 藤原賴長							藤原賴長							藤原賴長						







後深 一九〇三 草 一九六四	建長 七	寶治 二	寬元 四	仁治 三	延應 一	
康元 二						
一九一六 一九二五 一九二六	一九〇七 一九〇八 一九〇九	一九〇七 一九〇八 一九〇九	一九〇三 一九〇四 一九〇五	一九〇三 一九〇四 一九〇五	一九〇〇 一九〇一 一九〇二	一九〇〇 一九〇一 一九〇二
實治元年北條氏三浦氏を滅す	建長三年『續後撰和歌集』成る 全年時頼將軍頼朝の勅す 全五年建長寺と建立	寛元二年經時將軍頼朝の勅す				
源光行(歌)『千載』『新古今』『新勅撰』 『續後撰』『續古今』等(著)『海道記』 『養和和歌』 藤原定家(一八一七—一九〇一)(歌) 『千載』『新古今』『新勅撰』『續後撰』 『續古今』『續拾遺』等(著)『歌歌大 集』『明月記』『雨中吟』『頭註密勅』 『御集』『每月抄』『拾遺愚婦』『新古 今』(共)『新勅撰』等 順徳天皇(歌)『續後撰』『續古今』『續 拾遺』『新後撰』『玉葉』等(集)『順徳 院御集』(著)『八雲御抄』『禁秘抄』 北條時頼(一八四四—一九〇三)(歌)『新 勅撰』『續後撰』『續古今』『續拾遺』 『玉葉』等(撰)『貞水式目』 藤原公經(一八三二—一九〇四)(歌)『新 古今』『新勅撰』『續後撰』『續古今』 『續拾遺』等 久我通光(一八四七—一九〇八)(歌)『新 古今』『新勅撰』『續後撰』『續古今』 『續拾遺』等 菅原爲長(一八〇八—一九〇六)(歌)『續 後撰』『續古今』『續拾遺』『新千載』等 (著)『文鳳抄』 道助法親王(一八五五—一九〇八)(歌) 『新勅撰』『續後撰』『續古今』『續拾 遺』『新後撰』等 藤原道家(光明寺)(一八五三—一九一 一)(歌)『新勅撰』『續後撰』『續古今』 『續拾遺』『新後撰』『玉葉』等(著) 道元(一八六〇—一九一三)(禪)『龍頭學 道用心集』『龍頭實慶記』等	源光行(歌)『千載』『新古今』『新勅撰』 『續後撰』『續古今』等(著)『海道記』 『養和和歌』 藤原定家(一八一七—一九〇一)(歌) 『千載』『新古今』『新勅撰』『續後撰』 『續古今』『續拾遺』等(著)『歌歌大 集』『明月記』『雨中吟』『頭註密勅』 『御集』『每月抄』『拾遺愚婦』『新古 今』(共)『新勅撰』等 順徳天皇(歌)『續後撰』『續古今』『續 拾遺』『新後撰』『玉葉』等(集)『順徳 院御集』(著)『八雲御抄』『禁秘抄』 北條時頼(一八四四—一九〇三)(歌)『新 勅撰』『續後撰』『續古今』『續拾遺』 『玉葉』等(撰)『貞水式目』 藤原公經(一八三二—一九〇四)(歌)『新 古今』『新勅撰』『續後撰』『續古今』 『續拾遺』等 久我通光(一八四七—一九〇八)(歌)『新 古今』『新勅撰』『續後撰』『續古今』 『續拾遺』等 菅原爲長(一八〇八—一九〇六)(歌)『續 後撰』『續古今』『續拾遺』『新千載』等 (著)『文鳳抄』 道助法親王(一八五五—一九〇八)(歌) 『新勅撰』『續後撰』『續古今』『續拾 遺』『新後撰』等 藤原道家(光明寺)(一八五三—一九一 一)(歌)『新勅撰』『續後撰』『續古今』 『續拾遺』『新後撰』『玉葉』等(著) 道元(一八六〇—一九一三)(禪)『龍頭學 道用心集』『龍頭實慶記』等	北條經時	藤原頼嗣	北條時頼		

龜山 一九〇九 一九六五	弘長 三	文應 一	正元 一	正嘉 二	建治 三	
一九二二 一九二三 一九二四 一九二五	一九二二 一九二三 一九二四 一九二五	一九二二 一九二三 一九二四 一九二五	一九二二 一九二三 一九二四 一九二五	一九二二 一九二三 一九二四 一九二五	一九二二 一九二三 一九二四 一九二五	一九二二 一九二三 一九二四 一九二五
弘長二年僧親薨す	文永二年『續古今集』 成る 全年時宗將軍宗尊を 逐ふ 全四年『東鑑』成る 全六年元使來る	建治元年時宗元使と 斬る 全二年『續拾遺集』成 る	弘安四年元大學して 入寇す 擊ちて之れを 廢にす			
源親行(一八一五卒)(歌)『續後撰』 『關紀行』 藤原爲長(一八〇八—一九〇六)(歌)『續 後撰』『續古今』『續拾遺』『新千載』等 (著)『文鳳抄』 道助法親王(一八五五—一九〇八)(歌) 『新勅撰』『續後撰』『續古今』『續拾 遺』『新後撰』等 藤原道家(光明寺)(一八五三—一九一 一)(歌)『新勅撰』『續後撰』『續古今』 『續拾遺』『新後撰』『玉葉』等(著) 道元(一八六〇—一九一三)(禪)『龍頭學 道用心集』『龍頭實慶記』等	源親行(一八一五卒)(歌)『續後撰』 『關紀行』 藤原爲長(一八〇八—一九〇六)(歌)『續 後撰』『續古今』『續拾遺』『新千載』等 (著)『文鳳抄』 道助法親王(一八五五—一九〇八)(歌) 『新勅撰』『續後撰』『續古今』『續拾 遺』『新後撰』等 藤原道家(光明寺)(一八五三—一九一 一)(歌)『新勅撰』『續後撰』『續古今』 『續拾遺』『新後撰』『玉葉』等(著) 道元(一八六〇—一九一三)(禪)『龍頭學 道用心集』『龍頭實慶記』等	宗尊親王	北條時宗	藤原兼平		

後字 一九二七 一九八四		弘安 一〇		全五年備日、蓬寂、		勅撰『新後撰』、『續古今』、『續拾遺』、『新後撰』等 日蓮上人一八八二—一九四二(著)『觀心本尊抄』、『御集口傳抄』等 安嘉門院四條(阿佛尼)一九四三 歿(歌)『續古今』、『續拾遺』、『新後撰』、『玉葉』、『續千載』等(著)『十六夜日記』、『夜の鶴』、『うた、わの記』、『乳母の文』 一條爲氏一八八二—一九四六(歌)『續後撰』、『續古今』、『續拾遺』、『新後撰』、『玉葉』等 藤原爲教(歌)『續後撰』、『續古今』、『續拾遺』、『新後撰』、『玉葉』等 一條實經一八八六—一九四七(歌)『續後撰』、『續古今』、『續拾遺』、『新後撰』等 中務(著)『中務内侍日記』 崇道(東六郎)(歌)『續後撰』、『續古今』、『續拾遺』、『新後撰』等 葉室時長(著)『保元物語』、『平治物語』、『源平盛衰記』(?) 橘成季(著)『古今著聞集』 藤原隆祐(歌)『新勅撰』、『續後撰』、『續古今』、『續拾遺』、『新後撰』等 一條家經一九〇八—一九五三(歌)『續古今』、『續拾遺』、『新後撰』、『玉葉』、『續千載』等	
伏見 一九二五 一九七七		正應 五		正應二年貞時將軍惟康と逐ふ		北條貞時 惟康親王	
永仁 六		弘安 一〇					
一九五八—一九五九		一九四七—一九四八		一九四八—一九四九		一九五〇—一九五三	

後伏 一九四八 一九九六		正安 三		北條師時 久明親王	
後二 一九四五 一九六八		乾元 一		北條時村一九〇二—一九六五(歌)『續拾遺』、『新後撰』、『玉葉』、『續千載』等 拾遺』、『新後撰』、『玉葉』、『續千載』等	
嘉元 三		嘉元元年『新後撰』成 嘉元二年貞時將軍久明と廢す			
德治 二		德治二年貞時將軍久明と廢す			
延慶 三		南浦(圓通大慈國師)一九六八歿(著)『傍科羽虱原人論』等 四圓寺公衡一九二四—一九七四(歌)『續拾遺』、『新後撰』、『玉葉』、『續千載』等(著)『管見記』		守邦親王	
應長 一		正和二年『玉葉集』成 正和金澤文庫と股 全五年『續千載集』成 文保二年『續千載集』成			
正和 五					
文保 二					
元應 二		九條師教一九三七—一九八〇(歌)『新後撰』、『玉葉』、『續千載』、『續拾遺』、『新十載』等 中院通重一九八二卒(歌)『新後撰』、『玉葉』、『續千載』、『新十載』等 藤原定房(歌)『新後撰』、『玉葉』、『續千載』、『新十載』等(著)『吉續記』		北條高時	
花園 一九五七 二〇〇八					

元亨	正中	嘉曆	元徳	元弘	建武
三	二	三	二	三	二
一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五	一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五	一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五	一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五	一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五	一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五
元亨元年天皇始めて 二年「藤原」稱す と上る	天皇北條氏と滅さん として事敗る 正中二年「續後拾遺 集」成る	北條高時反、天皇笠 に幸す、補正成兵 を起して賊を討つ	紀元一九九二年高時 天皇と隠岐に遷し光 厳帝を立て年號とす	正慶(一)と號す 藤原房去る 足利親王と試す 光厳帝と立て北朝と 稱す、紀元一九九八 年北朝年號と曆應 (四)と名付く 是より南朝に別に分 かれ南朝は吉野に、分 朝の軍進りに敗らる	北朝年號、永(三) 北朝年號、和(四) 正平元年「風雅集」成 る 北朝年號、延(五)
二條為隆一九三五—一九八四(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等(著)『續後拾遺和歌集』 一條内親一九六一—一九八五(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等	藤原冬平一九三五—一九八七(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等 九條房實一九五一—一九八七(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等 二條為相一九二三—一九八八(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等 津守國道一九三七—一九八八(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等	花山院為兼一九六一—一九九二(歌)『 新後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 等(著)『玉葉集』 藤原冬敏一九五八—一九九七(歌)『續 千載』等 藤原冬敏一九五八—一九九七(歌)『續 千載』等 藤原冬敏一九五八—一九九七(歌)『續 千載』等 藤原冬敏一九五八—一九九七(歌)『續 千載』等	後拾遺等(連)『菟玖波』(著)『續千 載集』『新後撰集』 後醍醐天皇(歌)『新後撰』『玉葉』『續 古今』『續後拾遺』『風雅』等(著)『建 武年中行事』(文)『扶桑拾遺』 虎關一九三八—二〇〇六(著)『元享釋 書』『異制庭訓往來』『海城略』和 漢編年干支全圖『濟北集』 花園天皇(歌)『玉葉』『續古今』『續千 載』『新後撰』『續後拾遺』等(著)『風 雅集』 玄惠法師二〇〇〇(著)『庭訓往來』 『庭訓往來』『建武式目』 (共)	吉田兼好一九四三—二〇一〇(歌) 『續千載』『續後拾遺』『風雅』『新千 載』等(著)『兼好法師集』(著)『徒然 草』 夢窓國師一九三四—二〇一〇(歌)『風 雅』『新千載』『新拾遺』『新後撰』等 (連)『菟玖波』 津守國夏一九四九—二〇一三(歌)『續 千載』『新後拾遺』『風雅』『新千載』 等 飛鳥井雅孝一九四二—二〇三〇(歌) 『新後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾 遺』『風雅』等 近衛基綱一九六四—二〇一三(歌)『續 後拾遺』『新後撰』『風雅』『新千載』 等 北畠親房一九五三—二〇一四(歌) 『續千載』『續後拾遺』『玉葉』等(著) 『職原抄』『神皇正統記』三十一社	
光嚴帝 一九六三 二〇二四	光嚴帝 一九六三 二〇二四	光嚴帝 一九六三 二〇二四	光嚴帝 一九六三 二〇二四	光嚴帝 一九六三 二〇二四	光嚴帝 一九六三 二〇二四

元亨	正中	嘉曆	元徳	元弘	建武
三	二	三	二	三	二
一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五	一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五	一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五	一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五	一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五	一九八三 一九八四 一九八五 一九八六 一九八七 一九八八 一九八九 一九九〇 一九九一 一九九二 一九九三 一九九四 一九九五
元亨元年天皇始めて 二年「藤原」稱す と上る	天皇北條氏と滅さん として事敗る 正中二年「續後拾遺 集」成る	北條高時反、天皇笠 に幸す、補正成兵 を起して賊を討つ	紀元一九九二年高時 天皇と隠岐に遷し光 厳帝を立て年號とす	正慶(一)と號す 藤原房去る 足利親王と試す 光厳帝と立て北朝と 稱す、紀元一九九八 年北朝年號と曆應 (四)と名付く 是より南朝に別に分 かれ南朝は吉野に、分 朝の軍進りに敗らる	北朝年號、永(三) 北朝年號、和(四) 正平元年「風雅集」成 る 北朝年號、延(五)
二條為隆一九三五—一九八四(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等(著)『續後拾遺和歌集』 一條内親一九六一—一九八五(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等	藤原冬平一九三五—一九八七(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等 九條房實一九五一—一九八七(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等 二條為相一九二三—一九八八(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等 津守國道一九三七—一九八八(歌)『新 後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 『風雅』等	花山院為兼一九六一—一九九二(歌)『 新後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾遺』 等(著)『玉葉集』 藤原冬敏一九五八—一九九七(歌)『續 千載』等 藤原冬敏一九五八—一九九七(歌)『續 千載』等 藤原冬敏一九五八—一九九七(歌)『續 千載』等 藤原冬敏一九五八—一九九七(歌)『續 千載』等	後拾遺等(連)『菟玖波』(著)『續千 載集』『新後撰集』 後醍醐天皇(歌)『新後撰』『玉葉』『續 古今』『續後拾遺』『風雅』等(著)『建 武年中行事』(文)『扶桑拾遺』 虎關一九三八—二〇〇六(著)『元享釋 書』『異制庭訓往來』『海城略』和 漢編年干支全圖『濟北集』 花園天皇(歌)『玉葉』『續古今』『續千 載』『新後撰』『續後拾遺』等(著)『風 雅集』 玄惠法師二〇〇〇(著)『庭訓往來』 『庭訓往來』『建武式目』 (共)	吉田兼好一九四三—二〇一〇(歌) 『續千載』『續後拾遺』『風雅』『新千 載』等(著)『兼好法師集』(著)『徒然 草』 夢窓國師一九三四—二〇一〇(歌)『風 雅』『新千載』『新拾遺』『新後撰』等 (連)『菟玖波』 津守國夏一九四九—二〇一三(歌)『續 千載』『新後拾遺』『風雅』『新千載』 等 飛鳥井雅孝一九四二—二〇三〇(歌) 『新後撰』『玉葉』『續千載』『續後拾 遺』『風雅』等 近衛基綱一九六四—二〇一三(歌)『續 後拾遺』『新後撰』『風雅』『新千載』 等 北畠親房一九五三—二〇一四(歌) 『續千載』『續後拾遺』『玉葉』等(著) 『職原抄』『神皇正統記』三十一社	北朝年號、延(五)
光嚴帝 一九六三 二〇二四	光嚴帝 一九六三 二〇二四	光嚴帝 一九六三 二〇二四	光嚴帝 一九六三 二〇二四	光嚴帝 一九六三 二〇二四	光嚴帝 一九六三 二〇二四









靈元 二三一四 二三九二	延寶 八	寛文 一〇	天和 三
二三三三 二三三三 二三三三 一六八〇	二三三三 二三三三 一六七三	二三三三 二三三三 一六七三	二三三三 二三三三 一六八三
寛文三年殉死と禁中 全五年布帛の丈尺を 定む	延寶元年英人通商と 乞ふ許さず 全三年商家、探幽、歿 全八年「扶桑拾葉集」 成る	全十年「本朝通鑑」成 る	
江村野嶽二三二五―二三二四(著)「老 人雜記」 野中兼山二三七五―二三三三著書傳は らす 深草元政二二八三―二三二八(著)「元 々唱和集」身延紀行「如來秘藏」 「小止抄抄」扶桑隱逸傳「草山和歌 集」 石田未得二二四四―二三一九(著)「吾 吟我集」 羅屋立圃二二六〇―二三二九(著)「嘸 草」往萬歲「片輪車」祝俳諧「な さな源氏」等 石川丈山二二四三―二三三二(著)「詩 仙」朝鮮雜語集「本朝詩選註」詩 法正義「覆篋集」等 宏原貞室二二七〇―二三三三(著)「獄 草」百人一首抄」等句二併帶故人五 百題「全續」等 加藤繁齋二三三四卒(著)「方丈記酒説」 「徒然草抄」三部抄附註」等 後水尾天皇(歌集)「隠果集」一字御抄」 「源氏物語伏見屋」等 松江重頼二二六七―二三四〇(著)「犬 子集」毛吹草」武藏野」等 西山宗因二二六五―二三四二(著) 「普草」四人法師」十會集」ひる か」宗因發句集」等 山崎闇斎二二七五―二三四二(著)「會 津風土記」小治政叢書」朱子評義」 「中和集」性論明備録」大學啓蒙 集」等 林春齋二二七八―二三四〇(著)「日 本王代一覽」中華盛代紀略」日本行 將傳」本朝通鑑」孟子諺解」論語講			
徳川光國			

後西 院 二三九七 二三四五	明曆 三	萬治 三	寛文 二	後光 明 二二九三 二三一四	承應 三	慶安 四	正保 四	寛永 一四	明正 二二八三 二三五六	寛永 六
二三二二 二三二二 一六六一 一六六一	二三二二 二三二二 一六六一 一六六一	二三二二 二三二二 一六六一 一六六一	二三二二 二三二二 一六六一 一六六一	二三二二 二三二二 一六六一 一六六一	二三二二 二三二二 一六六一 一六六一	二三二二 二三二二 一六六一 一六六一	二三二二 二三二二 一六六一 一六六一	二三二二 二三二二 一六六一 一六六一	二三二二 二三二二 一六六一 一六六一	二三二二 二三二二 一六六一 一六六一
明曆二年朝鮮使來る 萬治二年舜水節化							正保元年國郡及び諸 城の圖成る	寛永十五年關人の通 商と許し出島地に居 らしむ 全年島原の亂あり		
鈴木正三二三二九―二三三五(著)「三 人比丘尼」因果物語」萬民徳用」草 庵雜記」履脚橋」等 林羅山二二四三―二三二七(著)「東 鑑綱要」詳書治要補」大學和字鈔」 「寛永諸家系圖譜」貞觀要政疏解」 「徒然草野植」林羅山集」詩集」等 松永貞徳二三三一―二三三三(著) 「澁川」油粕」御象」戴恩記」歌林 樓歌」徒然草」草」堀川百首抄」前 車集」道遠集」 鈴木正三二三二九―二三三五(著)「三 人比丘尼」因果物語」萬民徳用」草 庵雜記」履脚橋」等 林羅山二二四三―二三二七(著)「東 鑑綱要」詳書治要補」大學和字鈔」 「寛永諸家系圖譜」貞觀要政疏解」 「徒然草野植」林羅山集」詩集」等 松永貞徳二三三一―二三三三(著) 「澁川」油粕」御象」戴恩記」歌林 樓歌」徒然草」草」堀川百首抄」前 車集」道遠集」 澤庵和尚二三三三―二三三五(著)「遊 智」 中江藤樹二二六八―二三〇九(著) 「孝經學」大學啓蒙」論語解」 「草」心學文集」江四女集」等 木下勝俊(長嘯子)二三二九―二三〇九 「歌集」東山家々記」 「四生歌合」うなひ松」戀の歌合」武 藏井了意(著)「大張子」御伽婢子」武 藏鏡」堀忍記」東海道各所記」本 朝女鑑」等 松永貞徳二三三一―二三三三(著) 「澁川」油粕」御象」戴恩記」歌林 樓歌」徒然草」草」堀川百首抄」前 車集」道遠集」										
徳川家綱										









文化	一四	二四六三二八〇三
		二四六二二八〇四

文化元年魯國使來る  
三年四年魯國蝦夷地  
に來寇す仍て松前奉  
行と置きて變に備ふ  
五年英船長崎と懸接

(著)論孟學府釋解『詩經釋解』書  
經釋解『虛字解』『習文錄』『淇園  
楚辭』(南仙笑)二四六七(著)『猪の  
嫁入』敵討三組盃『報仇高尾外傳』  
『敵討娘捨山』等  
加藤千隆二二九二二四六八(著)『萬  
葉集略解』『うけらか花』『ゆきかひ  
ふり』萬葉新探百首『香取日記』等  
柴野栗山二二九七二四六八(著)『栗  
山封事』『栗山文集』  
伊東藍川二二九九二四六九(著)『論  
語徵正文』『歷代通記』『心賦考註』  
上田秋成二二九九二四六九(著)『く  
ま物語』『雨月物語』『冠帽綴』『綴  
語通』等  
大屋喜住二二九四二四七〇(狂歌)  
『狂歌題林抄』『徳和歌後萬載』『狂  
歌すまひ草』  
近松徳三二二四一四二四七〇(著)『箱  
根籠驗雙仇討』『朝顔日記』等  
村田春海二二四〇六一二四七一(著)  
『時文摘』『琴後集』『歌苑古題類  
抄』『假字拾要』『和歌大綱』等  
山本北山二二四二二四七二(著)『孝  
本集』『作文志』『作詩志』『日  
手拈岡持』(明誠堂喜三)二二九九五  
一四七二(著)『鑑入七人化粧』『太  
平記』『八講釋』『銷入道仙沖』『新風  
俗志』『氣のくすり』『我面白』等  
(狂歌)『狂歌すまひ草』『狂歌題林  
抄』『徳和歌後萬載』等  
宇野東山二二九五二四七三(著)『詩  
經古註標』『古文尚書標』『左傳

上杉治憲

光格 二四三一  
二五〇〇

寛政	二	二四六〇一八〇〇
享和	三	二四六一二八〇一

朱樂晉江二二九八二四五八(集)『古  
今馬鹿集』『大抵御覽狂歌大體』(狂  
歌)『狂歌題林抄』『狂歌すまひ草』(徳  
和歌)『後萬載集』  
僧大典(編)『北禪遺草』二二七九二四六一(著)  
『北禪遺草』二二七九二四六一(著)  
『詩集註』等  
細井徳民二二三八二四六一(著)『詩  
のそまや』『櫻鴨前集』『全遺稿』  
本居宣長二二九九〇二四六一(著)  
『古事記傳』『玉櫛笥』『歷朝詔詞解』  
『古今集遺鏡』『源氏玉の小櫛』(詞  
ノ玉緒)『玉勝間』『拾遺集』等  
小澤滋庵二二九九〇二四六一(著)『六  
帖詠藻』『抄分卷』『神中和歌六帖』  
木村野齋(兼)『兼』二二九九六一二四六一  
(著)『温泉記述』『然死狂言』『異言  
隨筆』『散葉堂雜錄』『海外佚書目録』  
唐衣橋州(醉竹庵)二四〇三二四六一  
(狂歌)『狂歌題林抄』(徳和歌)『後萬載』  
中井敬善(竹山)二二九九〇二四六一  
(著)『草芽危言』『時律兆』『非微』逸  
荒木田久老二二四〇六一二四六四(著)  
『肥前國風土記』『日本紀歌之解』等  
横南瀛二二四六五五(著)『東西雜記』『北  
條瑣談』等  
伴嵩蹊二二九三二四六六(著)『閑田  
耕筆』『全次筆』『近世崎人傳』『閑  
文章論』『閑田文章』『閑田詠草』『國  
文世々の跡』『門田の早苗』等  
皆川淇園(原心)二二九九四二四六七

徳川家齊



仁孝 二四六〇 二五〇六	天保 一四	金陵の改鑄又數度 天保七年天下飢ゆ 十三年習學所と設く 十四年小朝拜と行ふ	尾崎雅路二四一五―二四八七(著)『群 山一覽』百人一首一夕話』増補明 本居春庭二四二三―二四八八(著)『前 の八衢』『詞の通路』『後拾遺集』佐 喜草』等 北川真嶺二四一三―二四八九(狂歌) 『狂歌選林抄』『狂歌武射志風流』等 鶴屋南北(四代目)二四一五―二四八九 (著)『敬時集』『四谷怪談』『俳 優水滸傳』『於染久松色讀賣』等 松平定信(樂翁)二四一八―二四八九 (著)『花月草紙』『風月集』『關の秋 風』『百志集』『實善集』『求言錄』陶 化之歌』『獨看和歌集』等 石川 雅望(六樹園・宿屋飯盛)二四 一三―二四九〇(著)『雅言集』『源 註餘韻』『嵯峨のすさび』『狂歌百人 一首』『代狂歌集』『狂歌』『徳和歌 後高哉』『狂歌すまひ草』等 十返舎一九二四九一(著)『藤栗毛』 『常夏物語』『合邦社』『廓意氣地』分 福茶賀問』等 頼三陽二四四〇―二四九二(著)『日 本外史』『日本政記』『通議』『日本樂 府』『山陽詩鈔』『山陽文稿』等 本居大平二四一六―二四九三(著)『玉 鐘百首解』『名草の流つ』『有馬日 記』『古音類聚』『和風紀行』『稻草集』 等 大石千引二四三〇―二四九四(著)『榮 花物語抄』『大鏡觀短抄』『元音種 野々會館筆』等 大鏡後集(平八)二四五六―二四九七 (著)『儒門空虛聚語』『洗心洞測記』
--------------------	----------	--	--

弘化 三	二五〇三―二八四三 二五〇四―二八四四	弘化元年和蘭の使來 二年亞米利加船浦賃 に來りて互市と請ふ 明年又來る 江戸城元年二年三年 大火	『洗心洞詩文』 藤非高尙二四二四―二五〇〇(著)『松 舍文集』『松の落葉集』『伊勢物語新 釋』『大祓後後釋』等 屋代弘賢二四一八―二五〇一(著)『參 考伊勢物語』『輪池遺書』 對塔庵若丸二四二二―二五〇二(俳句) 林述齋(衡)二四三九―二五〇一(著) 『讀府政事錄』『實地』『朝野新聞』武 家名目』等 渡邊華山二四六三―二五〇二(著)『惟 機論』『越舌或問』『越舌小説』等 加茂季隆二四二二―二五〇二(著)『富 土日記』(狂歌)『徳和歌後高哉』等 柳亭 種彦二五〇二(著)『女合那 辻談義』『那那國物語』『藤紫田舎 源氏』『遊理志料』『川捨箱』『高尾考』 等 爲永春水二五〇二(著)『海曆』『いろ は文庫』『好文士傳』『貞操婦女八賢 』等 香川 景樹二四三〇―二五〇三(著) 『新學異見』『中空日記』『古今集正義』 『土佐日記』『見』『桂園一枝』『桂園集』 『桂園遺文』等 平田篤胤二四三六―二五〇三(著)『古 史傳』『古史微』『古史成文』『神字日 文傳』『歌道大意』等 青山延子二四三六―二五〇三(著)『皇 朝史略』『國史紀事本末』『征韓雜志』 『明徴錄』『文島』『錢譜』 伴信友二四三三―二五〇六(著)『假字 本末』『殘櫻記』『比古婆衣』『官社私 考』『史籍年表』『古事逸傳考』『長等 の山風』等
---------	------------------------	---	--

徳川家慶

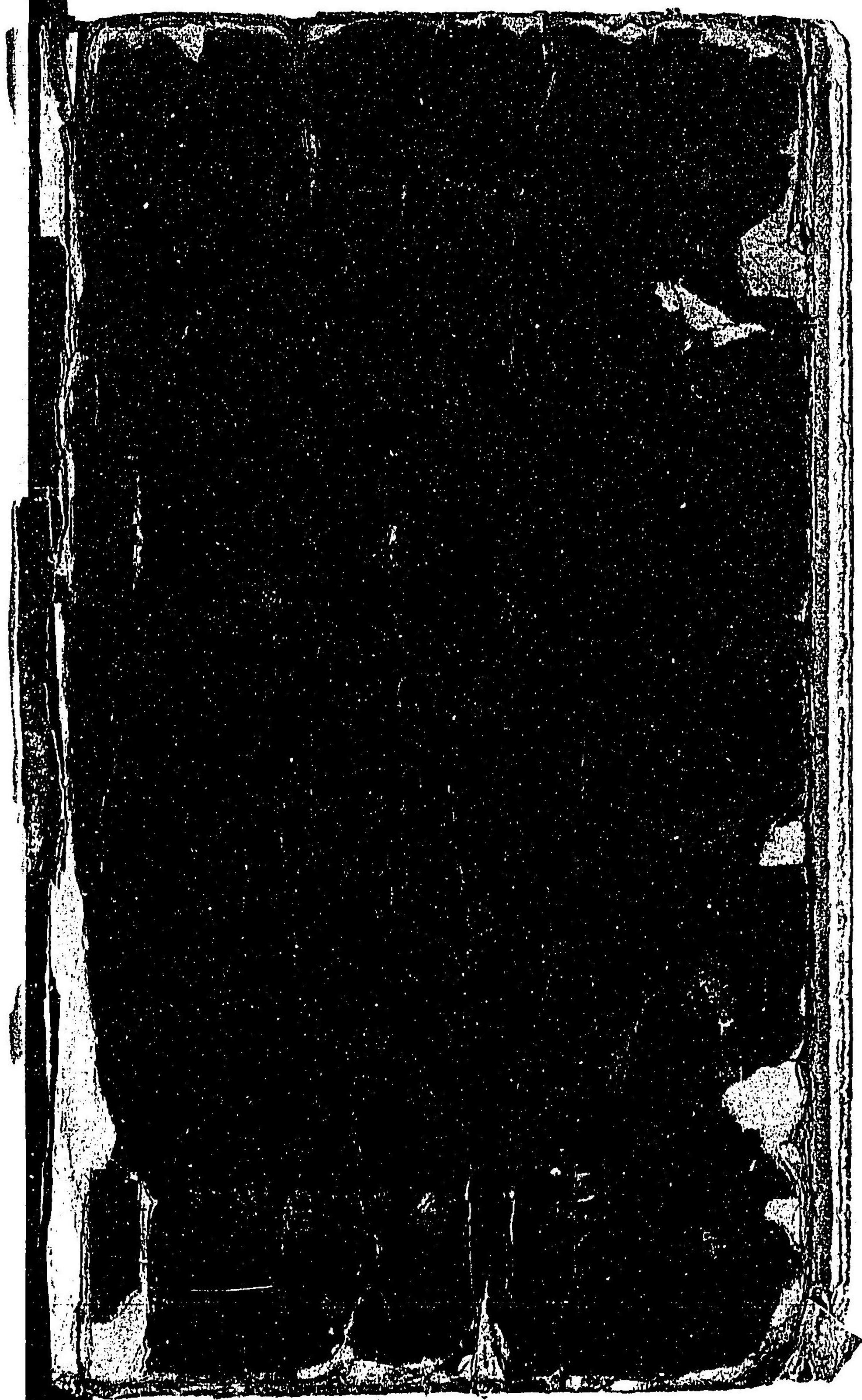


孝明 二四九一 二五二六			
元治	文久	萬延	
一	三	一	
二五二四 二五二五 一八四六 一八六五	二五二三 二五二四 一八六三 一八六四	二五二〇 二五二一 一八六〇 一八六一	二五一九 二五二〇 一八五九 一八六〇
元治元年幕府諸國に 新關を置く	文久元年和宮關東將 軍家に嫁す 三年幕府京都に守護 職を置く	六年幕府五國と條約 を結び横濱港を開く 尊皇攘夷を唱ふるも のど開港と是とする ものど漸く多し	
足代弘訓二四五五—二五二七(著)『足 代弘訓集』『國史類聚』『歌集類聚』 『寛政雜纂』『六國史人名部類』等	岩瀬京山二四二七—二五二八(著)『其 餘昔八丈』『本調子三筋糸巻』『京鹿 子振袖日記』『食物沿革考』『和漢印 字考』『妹の糸巻』等	梁川星巖二四四九—二五二八(著)『星 巖集』『春山集』等	藤田東湖二四六六—二四一五(著)『袖 子』『常陸帶』『弘道館述義』『廻天 詩』『東湖詩鈔』 廣瀬淡窓二四四二—二五二七(著) 『淡窓詩話』『詩文集』
井伊直弼	徳川家茂	徳川家定	徳川齊昭

弘化		
嘉永	安政	
一	六	六
二五〇七 二五〇八 一八四七 一八四八	二五〇三 二五〇四 一八五三 一八五四	
嘉永二年英國船浦賀 に來りて牛痘を傳ふ 六年砲臺を築く此の 年米國の使又來る	安政元年魯國の使節 來る 三年米國の使節ハル リス來る此の年幕 府講武所を建つ 四年朝講開港を許さ ず幕府番書調所を置	
小山田與清二四三三—二五〇七(著) 『八洲文藻』『相馬日記』『柳書漫筆』 『十六夜日記』『殘月抄』等 岸本由豆流二四五六—二五〇六(著) 『後撰集』『註』『土佐日記考』『十六 夜日記考』『歌書爲家』『桂樹類纂』 『八代集補註』等	曲亭馬琴二四二七—二五〇八(著) 『里見八犬傳』『弓張月』『美少年錄』 『夢想兵衛』『朝比奈巡島記』『燕石樓 志』『玄同放言』『羈旅漫錄』『俳諧談 時』等 高井剛山(著)『星月衣冠傳』『三國妖 術傳』『通俗水滸傳』『和漢朗詠集』 『字解』『假字節用』『音訓國字格』等 海野柳園(幸典)二四四九—二五〇八 (著)『天音活川圖』『五十音口訣』 『國集』等 岩垣松苗二四三二—二五〇九(著)『國 史略』 朝川善庵二四四一—二五〇九(著)『大 學註解』『仁義略歌』『善庵隨筆』等 橋守部二四四一—二五〇九(著)『短歌 撰格』『長歌撰格』『文章撰格』『稗威 道別』『稗威道別』『心の種』『橋守部 家集』等 高野長英二四六四—二五二〇(著)『戊 戌夢物語』 千種有功二四五七—二五二四(歌集) 『千種屋集』 藤田東湖二四六六—二四一五(著)『袖 子』『常陸帶』『弘道館述義』『廻天 詩』『東湖詩鈔』 廣瀬淡窓二四四二—二五二七(著) 『淡窓詩話』『詩文集』	
徳川家定	徳川齊昭	







205288-000-8

62-310

日本文学史

池谷 一孝/述

[M30]

EDV-0356



